
烈女 姜英姫

くまごろー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

烈女 姜英姫

【コード】

N9304D

【作者名】

くまごるー

【あらすじ】

二十年ぶりに再会を果たす男女の純愛物語。

(一) 翻訳の依頼

創立六十年を誇るの檉山かしやま学園高校は都内ではそこそこの名知れた進学校だ。その校長室のドアを開けて、勝又かつまた達也たつやは改めて広いと思つた。天井にまでとどく優勝カップやトロフィーを飾ったガラスケースを背にした梶井かじい校長が思ったより小さく見えた。

「あ、勝又先生、お呼び立てしまして、どうも」

「はっ、いえ」

達也は校長室に良い印象を持っていない。ここは先代の渚上ふちがみ校長から何度も罵ののしられた場所だったからだ。

……それにしても非常勤講師が校長からじきじきに呼び出されるのは事件だ。

勧められたソファに浅く腰を下ろして達也は校長のことばを待った。

「一週間先の火曜日ですがね、韓国の女子高から訪問団がやって来るのは知っているでしょ？」

韓国と聞いて達也はビクつとした。

……僕は朝礼でいちいち予定を知らせてもらえる専任じゃないものな……。

「いえ、特には何も伺っていませんが」

「そうでしたか？ 仁川インチョンの瑞泉ずいせん女子高等学校。うむ、なかなかの名門らしいです。教頭以下十三名です。それで、私が歓迎の辞を述べらんですが、少し見栄を張りたいんですよ、ははは。で、挨拶の冒頭を先生のお得意な韓国語、と言ってもカタカナにしてもらえませんか。原稿は明日にでも渡しますんで、ひとつ頼まれてください」

……そういうことか……

用件の中身が分るまではやはり校長室は緊張する。

「わかりました。やってみます」

「当日ですが、空き時間ありますか？」

「火曜日なら三、四限が空いています」

「向こうからも通訳が同行しますが、レセプションの後半だけでもお手伝い願えませんかね」

「わかりました。二限を終えて十一時過ぎには伺います」

「よろしく」

檉山学園の教員にはたまたま韓国語の出来る者がなかった。それで非常勤の達也に校長の気紛れな白羽の矢が立ったというわけだ。

五十歳になった達也は独身だった。妻に先立たれたので離婚したのでもない。結婚しようとして叶わなかった。失敗した、いや、あれは失敗させられたのだ。先代の淵上校長がまだ四十半ばで校長になりたてのときだった。もう二十年が経つ。

(二) 噂の発端

二十年前、達也には韓国に結婚を考えた恋人がいた。習い始めだったが韓国語も少しならできた。檜山学園高校で専任教員だった彼は、長期休暇中や週末に割り当てられる校務を、気の弱そうな後輩に押しつけ、買収し、拝み倒して代わってもらい、韓国を往復しなければならなかった。それは韓国人の女性との恋愛でしかなかったのだが、周囲はそう受け取らなかった。

当時、妓生^{キセン}パーティは一大ブームの観^{あま}があつた。円高を利用して物価の安い韓国に出かけては女を買い漁る男たちの韓国旅行は、そう呼ばれていた。職場では韓国の力の字も口にしたつもりはないが、達也の韓国通はいつの間にもやら教職員に知れ渡り、女子事務員たちは挨拶するのも汚らわしいとばかり軽蔑の色を目に浮かべて一歩退く。とたんに呼吸する空気が薄くなる。事務室に給与明細を取りに行くのもおつくうだった。現に梶井校長がこんな話を持ち込むのだって、ふた昔前の勝又達也^{キセン}狂い という噂をいまだに忘れていないからだ。

英姫^{ヨシヒ}が日本の女で、仙台とか大阪にでも住んでいたなら、ごく普通の遠距離恋愛でしかなかった。達也は韓国に住む一人の女を愛しただけで、相手かまわずのキーセン旅行の団体に加わったのではなかった。達也と英姫の二人は恋をして愛を育てようとした。そして男性の多くがそうするように、達也も結婚が本決まりになるまで、英姫のことは周囲には伏せておきたかった。

しかし、一度おかしな噂が立つてしまえば、どう取りつくるおうにも他人の口に戸は立てられない。二人は噂に負けまいと健気^{けなげ}にあわただしい逢瀬^{あひせ}を重ねた。それだけのことだ。

「勝又君、単刀直入に聞く。君が妓生^{キセン}に夢中だというのは本当かね？」

淵上校長にそう言われて達也は答えた。

「事実とは異なると思います」

「どう違うのだね」

「僕がつきあっている女性はキーセンではありません」

「じゃ、韓国女とつきあっているのは事実だな」

「む……、はい」

「水商売か？」

「え、まあ」

「悪いことは言わん。止^やめろ」

「お言葉を返すようですが、僕のプライバシーですので」

「私は君の身を案じて言ってるんだ。権利がどうこの問題じゃない。韓国女で水商売となれば、不法就労じゃないのか？ 君は教師なんだよ」

「……………」

「飲むな、遊ぶなと言っちゃいけない。目立つなと言ってるんだ。分かるな？ 分かったら帰れ」

「わかりました。以後気をつけます」

淵上校長の話は承服できない。達也は校長の かんこくオンナ 韓国女 という言い方にムツとした。この一言で彼の常識の古さ、韓国に対する無理解と蔑視は明らかだ。

……僕の身を案じてだと？ 大きなお世話だ……。

邪魔が入ると余計に燃え立つのが昔も今も変わらない恋心だ。彼は英姫との交際を止めようとは思わなかった。

(三) 畑中岳志という漢文教師

アイツはペラペラしゃべるだけで、授業は下手だし、担任もうつかり任せられない。学校で達也はそう陰口を叩かれていた。教員たちはばかりか生徒の一部からもそう思われているのを彼は知っている。とにかく、ほめられた例がない。

……仕方ないさ、無能教師は事実だしな。僕がほめられるとすれば、だれかが僕の能なしを利用するときだろう。上っ面のつき合いだけで、やつら仲間だなんて思っていないからな……。

居心地のよくない職場でも、一年先輩で漢文を教えている畑中岳志^{けし}だけは違った。岳志は一流の国立大を出た敬虔^{けいけん}なカトリックで、同時に徹底したエピキュリアンだった。彼は食を愛し、女を愛した。エピキュリアンは快樂主義者と訳されてイメージが良くない。快樂という用語が誤解され易いことをこの語の元になったエピクロス本人^{うれ}が憂えている。身体がよるこぶことをストレートに善とする岳志の思想は、建て前というタガのはまった職場で当然のように誤解された。

男子校の気安さもあってか、岳志はある日、性欲に日夜もだえる男子高校生たちを前に、風俗店での自らの体験のなかから、慎重に良質な部分を取り出して、ぶち上げた。『精神と肉体の理想的バランスの上に男女が結合することこそ生へのオマージュに他ならない。幸福は書物や議論のなかにはない。実感の中だっ』そう男女が仲良くすることの悦ばしさを語って聞かせた。しかし、これが不運の火種になった。生徒のなかに岳志の率直さを卑猥^{ひわい}だと受け取る者が混じっていた。岳志の体験談は汚らしい話となって生徒の家庭に持ち帰られた。電話連絡網で家庭から家庭へと飛び火した。一クラス五〇軒を焼き尽くして、大袈裟な被害報告になって校長の耳に届いた。

洲上校長はさっそく臨時の教員会議を召集し、三十分かけて、こ

つてりと岳志の油を絞った。

ぞろぞろと会議室を出る教員たちは また、あいつか…… といった素振り、だれも岳志の個性に近寄ろうとしなかった。達也が岳志を居酒屋に誘った。

「謹慎は三日間だったよね。初日だとまずいかな」

「千秋楽せんしゅうくよりマサカの初日のほうが安全なんだよ。しかし、ウチのバカ教師どもは仲間でも何でもねえなア。ウンコでも見るような目でジロジロ見やがってさ。あいつらナニをやらねえとでも言うんかよっ」

「まアまア、あんなの会議じゃないよ、儀式だよ。PTAの手前さ。校長に握りつぶす器量がありや元々なかったもんだろ。岳さんがしよげることはないって。校長の話だもんで、みんな一応は関心ある風をして集まっただけだ。それにしても岳さんの弁護をするヤツが一人も出なかつたのには驚いたな。僕もその一人だから、謝る。ただ、ひとつだけ言い訳させてくれ」

「いいよ、今さら」

「あそこで岳さんを弁護したら、火に油を注いで校長の話を長引かせるだけだった。岳さんの孤立無援は同情したよ、けど、意味のない会議を早く終わらせるには黙ってやり過ごすしかなかった」

「無言の同意を装った、そう言うんか？」

「是的シダ。長いものには巻かれないと生きちゃ行けない。腹ン中じゃそんな一方的で表面的なもんじゃねえだろ。ってね、僕の本音と校長の建て前が食いちがう。僕らは商売から建て前に縛られて、なかなか岳さんみたいな本音で言えない。羨ましいと思って、ああいう場じゃ意思表示できないんさ。黙っててもさ、自分が 飼い馴らされたな。って思った先生たちも多かつたと思うよ」

「まったく、高校生にもなって自分で考えねえんだから嫌になるなア。中学生にもなりや親の偽善を見抜くもんだろ。バカ息子は親の言いなりだ。俺が大事な息子を悪の道に誘いこんだとも思いやが

つたか、くそつ。教師が教育ママと同じことしか言えねえなら学校なんか意味はねえつ。家庭で剥かねえ一皮を俺がむいてやっただけのことじゃねえか」

「是的^{シダ}。チクる生徒がいる・いないは偶然だからね、こんなの災難だよ」

「ん、少し気が楽になった。サンキュ」

達也の同情に ありがとう ではしんみりしすぎると思ってたか、照れくさいのか、岳志は サンキュ とアゴをしゃくり尻上がりと言った。岳志は気分を変えたり話に勢いをつけるのに時折そんなふうにエイゴを使う。達也も岳志から習った是的^{シダ}「そつだ、没有^{メイヨウ}」ない、不要^{フイヤオ}「要らないなどを間^{あい}の手に使う。」

「達ちゃん英語は本物で、すげえんだつてな。相手はやっぱ金髪？」

「何だよ、いきなり？」

「岡本の爺さん、あの年でアメリカの大学出てんだつて？」

「ミッション系ウィツティア大。ピューリタンのコチコチだ。ねちねちな性格のくせしてな」

「コチコチでねちねちつてのはどういうウンコだ、あつはつは。ま、その岡ジイがさ、達ちゃんのLの授業を隣の準備室で立ち聞きしててだよ」

「ち、スパイかよ、あいつ」

「最後まで聞けよ」

「留学もしてねえのにあれだけ流暢^{りゅうじょう}なのは信じられねえつてさ、そう言つたぜ」

「主任が？ うすつ気味悪いな」

英語科主任の岡本は、事あるごとに 教案を工夫して授業臨んでいるね？ と釘を刺して来る。評価がきびしいので達也が一番苦手な相手だ。

「金髪とネンゴロでペラペラねえ。そんな色気のある話だといいな。主任の腹はその先だ。ほめちゃいないよ。裏を返すまでもない、し

やべるしか能がないって皮肉だろ。僕は教える英語なんてカラツキシ。頭の悪さは英語科じゃ有名だよ、ははは」

「俺の中国語は台湾の女の直伝だ。NHKは空々しい上にまどろっこくていけねえや。達ちゃんは今髪だろ、な？」

女性を間に置くと岳志には何かが見えて来るのか、エピキュリアン仲間を引き込もうというのかは分からないが、ともかく達也を話相手として対等に接しようという岳志の態度は好感が持てる。

……想像は勝手だけど、岳さん、英語は金髪女は短絡だよ……
達也は身の上話をするハメになった。

(四) かるうじて英語教師

「工業高校だったしさ、英語は大学に入る前に横田基地でバイトした二年間の聞き覚えなんだ。学問的なバツクは何もない。第一、松笠学園大なんて三流は世間じゃ相手にしないからね。僕も学校はアテにできなかった。英検一級を狙ってただけさ」

「ふうん」

「何たって 実用 英語検定だからね、細かいことをゴチャゴチャ言つてたら実用にならない。多少怪しくても歩留りで合格だ。詰め甘い僕向きだったのかもな」

「それはいいけど、何で松笠大？ パツとしねえだろ、あそこ」

「国立は無理、私立もイチかバチかじゃ受験料がもつたない。受からなきゃ困るんで松笠大。それが客観的な事実ね」

「主観的には？」

「それを言つたら岳さんは笑うよ」

「笑えるもんなら笑つてやるから、言えよ」

「彼女がね、やれる相手が欲しかったんだ」

「あーっはっはは」

「だつて高校三年、基地二年。女ひでりで計五年。大学じゃ女子の身体のふくらみにばっか目が行つてさ、夏なんか弱つたなア」

「達ちゃんもそつちはハツキリしてるねえ、ははは」

「何でも明け透けつてのも芸がないけどさ、男も女も欲望を隠すんだよね。隠しておきながらもどかしい探りっこしてさ。お互いやりたがっているのが分かると 相性がいい なぁんてキレイゴトだ…」

…

「^{トウイ}對、^{トウイ}對。ザツツライツ！」

「大学はその 一致点探し と英検に明け暮れた。でも、文学部つてほとんど教員免許を取るだろ？ 目当ての女の子たちがそうするもんで、僕も追っかけて教職を取った」

「あつはつは、ただの工口小僧だ」

「良と可が半々じゃとても先生にはなれない。くれるというから貰つといた免許が役に立つなんて思わなかった。もともと勉強はダメだし、英語もおしゃべりなだけだから、教えるための知識なんて量目不足もいいとこさ、先生には向いてないって思うことあるよ」

「大学で勉強しなかったのか？」

「教員は考えてなかったもん。それでも出来ることと出来ないことくらいは区別がついてたのかな」

「何が出来たんだい？」

「僕より英語が苦手なやつを煙に巻く、あははは。それも大人相手じゃ手強いけど、まアガキが相手なら ひよつとして って。そうすつとやつぱり教職しかないなあつて」

「ひでえ話だな、笑えねえ。あははは」

「反論しないよ。資格はともかく、資質の方がどうかなつて未だに悩む。器でもないのが ハズミ でセンセやつてんだよ。生徒にや気の毒、周囲にや迷惑な話だろ？ タイミングも悪かった。英検に受かつて妙な自信を持ちちゃつてた」

「自信、けつこうじゃないか」

「よかあないよ、テングだもん。外資系を狙つて高望みしてたら、いつの間にか卒業ギリギリでさ、焦つた、焦つた。そこに檉山学園の 教員急募 だよ。カシヤマくんは僕以上に焦つてたんだ。でなきゃ、僕みたいなのグズを探る学校じゃないものな。試験が面接だけだったしね」

「面接だけ？ カシヤマくんとしては異例だね」

「掲示板を眺めると、米文学の教授が通りかかつてさ、推薦状を書くから受けるつて。まさかと思つたけど、こつちも背水の陣だよ。何たつてバカがバレル筆記がない 魔がさしたんだ。『檉山学園は教員の給料がいいよ。何よりこの時期になりや倍率が低い。チャンスだよ』つて言われて、すっかりその気になつちまった。だから、ハズミだよ。ノータリンのペラペラが檉山学園に来ちまった。入つ

てから皆に迷惑をかけるなんて夢にも思わずにさア」

「みんな似たようなもんだろ」

「でも、ガキをだますとか、給料に釣られたじゃ志望動機にならないよ」

「たしかに教師らしくはねえな」

「まわりはハナっから教員志望の留学組で、デキがちがう。僕がうんうん唸っても仕上がらない試験問題もササッと作る。素質がなければ仕事場ってのは居づらいもんだよ。英語科で僕一人がボツコンと凹んでる。コンプレックス持つなってほうが無理なんさ」

岳志は腕組みをして首をひねった。

「え、何かおかしいこと言った？」

「ぜーんぶおかしい。きょう慰められるのは俺じゃねえのかっ」

「あははは、いや、すまん。いや、笑ってもいらんない。コンプレックスが深刻で胃カイヨウが手術の二歩手前なんだ」

「酒が飲める胃カイヨウなんて都合よすぎる。それに何だ、二歩手前ってのは」

「一歩手前だと飲めない、二歩手前なら少しはね、あははは」

「そんなん、ずりいよ」

「男が生きるにはさ、何かこうガアーツと夢中になれるものがないとなあ」

「ないこともない。達ちゃん、ハウマツチドゥーユーハブ？」

「マニ？ 二万五千」

「ここ出ようつ。今晚は俺につき合えっ」

「やだよ、そんな趣味ねえもん」

「ばあか」

二人は居酒屋を出た。

(五) 英姫との出会い

「どっかに行くん？」

「質問になってねえよっ！」

飲み屋街の冷たい風が吹きぬける道路に達也を待たせて、岳志はとあるビルの二階に駆け上がった。サラ金だった。

「よし、行こっ、達ちゃん」

「クレジットカードならあるけど」

「あるなら取っとけ。いいよ、調達した」

「な、どこへ行くん？」

「達ちゃん、カンゴク経験あるか？」

「禁固刑くらって教師もないだろ」

「カンゴクにはな、うんまい酒があるし、きれいな姐ちゃんもワンサカいるぞっ」

「おお、監獄にブチ込んでくれっ」

「だれがブタ箱に入るんだよっ。監獄ガアニラ、こりあイムニダ。」

サランヘヨのカンゴクだよっ

「韓国か？」

「マジャヨ、ソンセンニム」

「本物の韓国語、それ？」

「韓国姐ちゃんはカンゴクをカンゴクってハチュオンするんだ」

「宗旨を変えて、台湾から韓国へ進出か？」

「そんなところだ。挨拶を二つ三つ覚えるとな、香水ポンプの姐ちゃんたちが擦り寄って来て、ウリマルチャラシネヨ（うちのことはが上手いのね）ってくすぐってくれる。お世辞だけど悪い気はしねえ。あ、踊るときは足を半歩チマ（スカート）に突っ込んで裾を踏まねえようにな。ん？俺たちチーク専門だから心配ねえか、あっはっは」

岳志は韓国クラブ

無窮花

のどっしりと重たそうなドアを開け

た。暗い店内にまばらに点る灯りの下を女たちが行き来するたびに、色とりどりのチマが大輪の花のようにパツと咲き出る。幻想的な空間だ。

年の頃六十といった韓服の女性が出迎えた。

「オモ、畑中ソンセンニム。オソオセヨ。オレガンマニエヨ。オツトケチネシヨツソヨ（まあ、畑中先生、いらっしやい。お久し振りねえ。どうなさったの？）」

「オツトケもほっとけもねえな。オモニ、トワツソヨ（母ちゃん、また来たよ）だ。イブヌンネチング（こっちは吾輩の友人）勝又達也シ。ヨンオソンセン（英語の先生）イエヨ」

……岳さん、こんな芸があったのか。ふうん、韓国語が出来るんだ……。

「ようつ、ヨンヒちゃん！」

岳志の声が聞こえなかったのか、娘は無視した様子ではなく、無反応だった。風ようにスツと岳志の前を通り過ぎて、達也の前でピタリと止まった。一瞬だったと言えはウソになる。英姫と達也は二十秒ほども見つめ合って、まばたき一つしなかった。それも二人の意志で見つめ合っているというより、何か二人の背後か頭上か一つの意志が働いて、一組の男女が向き合わされたといった妙な感じだった。

何なんだ、これは？ 声には出さず、おどけてママに首をひねって見せた。ママも肩をすぼめて、どうなってるのでしょうか？

と無言で岳志に応えた。

声をたてるのも割り込むのも憚はばかられる空気だった。

初めて出会った男女はお互いの瞳の奥に、どれだけ自分たちの未来を読み取るものなのだろう。

達也はやつと半歩退いて「はあっ」とも「ほうっ」ともつかない溜め息をついた。眼はまだ夢に酔っているように見えた。娘の達也を見つめる眼もそのようだった。彼女はまっ青のチマとまっ白いチヨゴリに身を包んだうつくしい娘だった。

「これ、英姫。ご挨拶なさい」

ママの声に英姫と呼ばれた娘はハッと我に返って言った。

「オソオセヨ（いらっしやいませ）。ヨンヒエヨ（英姫です）。ソーンハムン（お名前は）オットケデセヨ？（何と仰言られますか）」
「先生のお名前は、と聞いています」

ママはそう言って岳志と連れ立って奥へ歩いて行った。達也と英姫も後をついていった。

「あ、名前ね。勝又達也です」

「チョンチョニマルスメジユセヨ（ゆっくり言ってください）」

……くり返せといってるのか？ 早口すぎたのかな……。

「マイネームイズ たつや かつまた」

「たちゅや カちゅマダらごよ？」

英姫の口から出た たちゅや は達也の鼓膜をくすぐった。背筋をぞくつとさせて快感が走り抜けた。達也が初めて経験する感覚だった。

…… 成人女性が女兒のような発音をするのでコケティッシュに聞こえるのかな。愛くるしい。舌足らずなのが何とも言えずいい。

たちゅや がタツヤじゃ惜しいな。英姫さんには たちゅや と呼ばれるのがいいな。人間って人の声だけでいぶん幸せな気分になれるもんなんだな……。

「英姫さん、いいんだ。たちゅや って呼んでくれ」

彼女はチョゴリの胸元からペンライトを抜いて、小さな光の輪の中でさかんに辞書のページをめくった。

「たちゅやし、わだしにほんごとおかつたです」

「遠かつた？」

「まだまだです、ってことですよ」

ママは岳志にオシボリを広げて渡してから、勝又に軽く頭を下げた。

「チョウムベツケツスムニダ」

達也はママの言葉をオウム返しに発音した。

「チョウムベpケツスmニダア」

「あらあ？ こちらウリマルお出来になるの？」

ママが驚いた。英姫が驚いた。岳志も目を丸くした。

「なんだよ、達ちゃん。韓国語ハングンマルわかるんか？」

「ぜーんぜん、初めてだもん」

「なんで言えるんだよ？」

「挨拶だと思ったからコピーしただけだよ。あの発音でよかったかい？」

「完璧ですわよ。驚いたわ、勝又先生」

ママがほめちぎった。達也は教師になって初めてほめられた。

「でも、意味わからん。状況的には 初めまして だろっかな。ははは」

「へえ、達ちゃんすげえ耳してんなあ。俺もカタコトは覚えたけど、達ちゃんなら上達は早えだろな」

「女性がしゃべると何とも言えない色気があるよねえ。習ってみるかな。でも野郎の韓国語メスホルじゃ野暮っただけか、あっははは」

達也は米軍基地の食堂メスホルを思い出した。……あの時も意味が分からないままオウム返しだった……。

岳志と達也が陣取ったボックスに英姫が法酒ボフチュの大徳利を持って来た。いたずらっぽく「ククツ」と笑って達也に言った。

「たちゅヤシ、きよそしましょ。どっちはやくことばおぼえる？ わだしにほんご、たちゅヤシはハングンマル、OK？」

「賭けだね、よし。で、僕が勝ったら何をくれるんだい、英姫さん？」

「なにもくれません。あだしかちます」
賭けは英姫から達也への巧まざる 無窮花ムゲンフア 常連への誘いになっ

た。達也は英姫に惹かれていった。

(六) 英姫来日のいきさつ

英姫は大学二年の一月、学年末試験を済ませ、休学届けを出したその足で金浦空港^{キンポ}へ向かった。彼女の飛行機は成田へ飛んで来た。

彼女の父親は五年前に他界していた。家業の韓服の仕立て販売が思うように行かず、貯えが底をついて母の手だけでは彼女の学費をまかなえなくなったからだ。英姫が日本に行きたいと言い出すと、母の良枝^{ヤンジ}は当然のように反対した。必要なだけ稼いだらすぐに帰って大学を続ける と苦もなく言つてのける娘が、良枝には危なっかしくて仕方ない。

……手っ取り早ければ、それだけ身の危険を覚悟しなきゃならぬいくらい分かりそうなものだ……。

「でも、母さん。このままじゃ秀哲^{スチヨル}を大学にやれないわよ。わたしだつて大学やめたくないし……。ちよつと休学するだけだから」

「気持ちはそうだろうけどね。ボロ家がいつの間にか立派になつてるのに、娘が帰つて来ない家があるのは知つてるだろ？」

「私はそういう子とは違うから。お願い、行かせて」

……そういう子とは違うか。行つたきり帰らない娘たちも最初はみんなそう思つたんだ。父さんが生きていたなら許しやしないよ。もつとも生きてりゃこんなことにはならないけど。あなた、どうしたらいいかねえ。あの娘を信じて行かせてやる？ 学校を諦めさせて韓国におくほうがいい？ あたしには分からないよ……。

母の良枝は閉じていた目を開けた。

「英姫、おまえは私の娘だよ。私だけじゃない、亡くなられた父さまもおまえを信じているからね、行つといで。ただ……」

「ただ、なんなの？」

「辛かつたらすぐに帰つておいでよ」

「やだ、母さんつたら。行く前から」

「私も父さんもハラワタがちぎれる思いでおまえを日本に出すんだ

から、それだけは忘れちゃダメだよ」

「わかりました」

母娘は抱き合った。

「お金のことで欲をかくときつと帰って来れなくなる。母さんは立派な家に住みたいなんて思わない。いいね、そんなのを親孝行だなんて間違っても思っくんじゃないよ」

良枝は娘に何度も念を押した。

(七) 口入れ屋の甘言

英姫も 無窮花^{ムゲンフワ} に来るについては迷ったのだった。韓国クラブのホステス補給ルートには口の達者な日本人がいる。彼らは娘たちの現状を見抜いて、話(釣り方)を変えろ。娘たちに共通しているのは経済的に困っているということだけだ。利口そうな娘にはプライドを傷つけないように話をすすめる。

「そりゃあ(貴女は良家のお嬢さんですから)韓国では出来ないでしょうね。気が退けるところがないわけじゃないですから。じゃ、少し日本の事を話させてください。男性に酌^{しやく}をするのは日本では当り前なんですね、尊卑の別なく女性はだれでもやります。日本の女性が嫌々やることなら、私だって韓国人の女性^{あなた}に勧めたりしません。

日本の男性は、女性に酌をしてもらっても、それが普通ですから感動がないのですよ。人間は珍しいものに感動するんですよ。クラブに来る客たちはそれなりの客層ですから、教養もありますよ。韓国女性が男に酌をしないことも知っています。それが良家の躰^{たて}けで韓国女性のたしなみだと承知しています。そうです、日本では失われて久しい女性らしさですね。男たちはそれに郷愁のようなものを持っています。男のように酒を飲む女性から酌をされてもありがたくな^{おくゆか}いですね。奥床^{おくゆか}しさをとどめているのは日本の女性じゃなくて、韓国人の女性です。ええ、フィリピン・パブも沢山ありますよ。あちらの女性が安く働いています。彼女たちも韓国人女性の代わりはつとまりません。なぜだかお分かりですか。はい、彼女たちは日本人男性が懐かしく想う文化を提供できませんからね。そこを貴女にご理解いただきたいのです。フィリピン、タイ、ロシア……単に珍しければいいというエキゾチズムとは違います。韓国の女性でないといけません。日本の男が求めるのは昔の日本にあつて今は無くなつたものです。そうでなければ、いくら日本人の男でも金まで払つて女性に奥床しさを求めますか。おわかりでしょう? このお話は

貴女のように聡明な方でないと申し上げにくいお話です。

韓国の女性が多く日本へ行くのも、韓国に残る儒教的な抵抗感がないからですね。はい、自由に自分で計画した生活ができます。人生設計は人それぞれありましようが、みな日本に行くのはそのためです。貴女には、ぜひ日本でご自分の人生を広げていただきたいと思いますよ。先程の文化的な違いも分ならず、自立心もない女性なら（私はこのお話を）勧めませんよ。仕事は、貴女が普通に振舞うことです。それが日本の男性の郷愁を誘うのですからね、普通になさればいい。客は貴女の教養にふさわしい会話と雰囲気を楽しむ紳士たちで、貴女は、言わば民間外交官のようなものですね。ですから教養は必要です。いや、貴女ならじゅうぶんできます。同じことが韓国では出来ませんし、何より金になりません。日本なら稼げます。お金はだれにも必要です。恥ずかしく思うことはありません。（日本に）一年もいれば生きた日本語が身につきますよ、わざわざ（大学の）日本語学科に行く必要はないですよ……」

話がうますぎる、英姬もそう思った。しかし、KBSの教養番組も同じことを言っただし、比較文化の教授からも同じことを聞かされた。

『日本人女性は男性に酌をするのを我が国の女性のように恥ずかしいことだとは思っていません。彼女たちはまるで酒宴の潤滑油でもあるかのようにかいかいしく働きます。酌もむしる進んでします。男性たちも酌をするからといって、女性を軽蔑することはありません。日本を、我々に伝統的な儒教道徳の徹底しない国だと考えるより、百年以上も前に西欧を取入れ、それを根付かせて来た異文化の国と考えたほうがよいでしょう……』

話を聞いただけで理解したと思い、自分を利口だと信じている娘ほど、こうした口車に乗せられる。経験よりも理屈が先行する、経済的に切実な女子大生たちは、次のような結論に至る。

……郷（日本という疑似西欧国）に入って郷にしたがうだけのこ

とだ。文化的バリアを乗り越えるだけだ。自立するために儒教道徳の古い上着を一枚脱ぐだけじゃないか。（賢く進歩的な私に）出来ないことはない。しかも、だれも私を知らない日本なら恥ずかしく思うことはない。日本の女たちがやる酌をして、私の経済的ピンチを脱することが出来るなら、日本に役に立ってもらおう……。

韓国クラブのホステスに高学歴で進取の気性に富んだ、ときに自分勝手な女性が多いように思えるのもあながち気のせいではない。

(八) こまかく稼ぐママ

韓国人経営の店を頼ってくる娘たちのほとんどが着の身着のままだ。そして入店と同時にチマ・チヨゴリを買い取らされる。が、これが韓国の値段ではないからバカ高い。初めに最低二着、翌月から最低一着ずつ増やしていく。ホステスたちは働きながら衣装代を返す。暗い店内で日本人客に気づかれることはまずないが、安い化学繊維のものを毎日のように着るから、自然光の下で見ると白地のものはもちろん、淡い色のもので汚れてないものはない。ママは月に一度、汚れが目立つ昼間にホステスたちを事務所呼び集めてロツカーを点検する。つまり、営業を始める。汚れた服で店に出られちゃ困るからね と言つて、安物の韓服を高く売りつける。娘たちがチマ・チヨゴリを買う店は出入りの業者が指定店だ。

英姫が ムゲンファ 無窮花 に入ったときも韓服屋が事務所に来ていて、ホステスたちはキャアキャアはしゃぎながら衣裳を選んでいた。彼女たちにも意地があるから仲間よりいいものを欲しがる。服が買えないホステスはクリーニングに出す。何度もクリーニングすると、縫い目がほつれ、金箔は剥はげるか変色して戻ってくる。ママの目はそれを見逃さない。早くお客に買わせるようになれ とハツパをかける。

ホステスが(ママの仲介で)客から韓服を買ってもらつと、店でカップルのお披露目をする。ママは勝者を仕立てて努力を評価し、ハミヨンテンダ^{II}なせばなる、とホステスどうしの競争心をあおる。ホステスは客の望み通りの見返りを提供しなければならぬ。韓服を買ってもらつというのはそういうことだ。

「英姫、あなたも好きなのを二着えらびなさい」

「二着？」

制服は貸与されると言われて来た。入店祝いにしても新しいのを

「二着もくれるはずがない。英姫はママに確認した。」

「ウチは買い取ってもらおうよ。」

話が違う。

「最初の韓服は支給されるのじゃないんですか？」

「よその店のことをウチで言っただけじゃありませんか？」

衣裳代は給料から二十五パーセントずつの四回で返済するのだという。経済的弱者の彼女たちは少しでも客の目を惹こうと派手でトビキリの安物を買う。すぐにダメになる。韓服屋の娘はママのカラーを見破った。業者のものは値段が高く仕立ての粗っぽい土産物だ。……ひどいものだから……。

英姫は所持金もなかったし、借金するのも性に合わなかった。

「家から持ってきたのがあるんです。いいですか、それで？」

ママは顔をしかめた。

「父さまの遺言だし、母さまとも約束して来ましたから、借金できないです」

「見せてごらん」

英姫はスーツケースから成人式に着た韓服を取出した。良枝の手作りで目のさめるようなブルーのチマとまっ白なチヨゴリはシルクで、ホステスたちのような安物ではない。女たちが口々に讃嘆の声をあげた。

「うわぁ、すてきねえ」

「英姫、うちは客商売だからね、それが少しでも汚れてたら着させないよ。替わりを用意するんだね」

どうしても一着は買わせたいらしい。

「私の韓服が汚れてたら言ってください。そのときは新しいのを買いますから」

……すっかりした子だよ。でも、すぐに二着め三着めが必要になる……。

その晩、英姫はソウルの母に電話した。

「母さん、家のドハデな安物じゃなきゃだめよ。すぐに五、六着送

ってちょうだいっ」

ホステスたちは美容院も何軒かの指定店を使うという。指定店なら二割ほど店から補助が出るからだ。先輩たちが言うには店の客を連れ込むホテルにも指定のものがあるという。売春を強要すると摘発されるので、ママはホステスたちに客との自由恋愛を仄めかす。店にやって来るのは女をモノにしようという男たちだ。ママは指名が少ない子に「ちゃんとすることをしなさいよ」と目を吊り上げる。ママは客に出させるホテル代も無関係のホテルに儲けさせはしない。裏でツルめばそこから利益が出る。客は少しも疑わずホテル代を払う。ホステスたちはチェックアウトの時に「お世話になってます。無窮花 からです」と告げて、領収書とは別に料金が書き込まれた紙片にホテルのゴム印を押してもらう。指定日までにママに渡せば、給料に上乗せされて現金が返ってくるクーポン券だ。わずかな額でも貧しい女たちは無視できない。無窮花 に使ってもらうホテル側は料金を二割引している。ママは女たちからクーポン券を一割で買い集めて月末に何軒かのホテルを廻る。ホテルはのべ料金の二割をママの手に渡す。一割がママのフトコロに入る。「身体を張って売上げに協力してもらっているんだもの、せめてこれくらいはさせてね」

ママは女たちに白じらしく恩を売る。

……美人だし頭も悪くない。ことばを覚えればナンバーワンだって遠くない。英姫は「稼ぐ だろう。いい拾いものをした……。ママはそう読んだ。そうかも知れなかった。また、畑中岳志と勝又達也の二人が連れ立って通うものと思ったが、これは少し外れた。バトンタッチでもしたように、畑中が姿を見せなくなったのだ。達也が英姫を目当てに通うのは二人の様子から察したが、この男は岳志のようにハデに飲み食いはしないし、仲間を連れて来るわけでもない。こんなケチな客に売出し中の有望株を独占させられない。ま、

英姫は人気者になって引つ張りだこになるから、そうそうべつたりも出来なくなるけどね……。

だれが金を運んで来るのか見極めるとあれほど言っているのに、英姫は達也のところにはかり行きたがる。また、二人して隅のボックスにこもってる。幼稚園じゃあるまいし、早く客あしらいを覚えて、店中に色気を振りまいて稼いでくれなきゃ困るじゃないか。美人なだけでは客は金を使やしない。お人形さんでは指名料は入って来ない……。

(九) 韓国語の学習

「ことを覚えるのは耳からさ」

達也は hamburger を米音でゆっくり発音した。

「僕、いま何て言った？」

「へmボゴ」

「日本語ではこう書くよ」

達也は英姫が読むようになったカタカナを書いた。

「ハンバーガーらごよ？ かんごくごちがいます」

「へmボゴでもなかつたろ？ 動物の鳴き声といっしょだ。同じものが違つて聞こえる。発音できてから文字で確認するといいよ。逆はダメだ」

「そうですか、わかりました」

英姫に指名が入った。

「たちゅヤシ、ミアネヨ（ごめんね）」

「いいさ、仕方ない」

ムゲンソファ 無窮花 の指名料はバカ高い。達也は酒をチビチビやって、英姫の戻るまで韓国語を自習する。店では相当な変人だ。客のつかないホステスが気の毒がつて韓国語を教えてくれることもある。達也はホステスたちの発音に全神経を集中する。韓国語は息の出し方一つでまるで別の単語になる。日本人の耳には同じ音に聞こえてしまふし、実際に同音異義語が多い。聞き取りのむずかしい言語に達也も苦戦する。

英姫に代わつて隣に座つたのは四十過ぎの、年齢を自覚した大阪弁の女だった。

「末子マルジャ言いますねん。なあ、フルーツよろしいやろ？ 若い子連れてくるさかい、な？ わたしな、空いてんねんけどな、店終わつたらご一緒できひん？」

「できひん」

達也は無視した。講座が開設されて間もないNHKのテキストを広げると、女は覗き込むようにして太り肉を擦りよせてきた。

「ハンゲンマルンエロウオヨ? (韓国語は……?)」

「エロウオヨって?」

「エロppタ。 ややこし 言うこつちや」

「むずかしい!! オリョプタじゃないのか? 末子さんはどこの出身?」

「プサネヨ」

「へえ、釜山プサンだとそう言うのかあ」

達也が感心したふうを見せたので、末子は得意らしい。

…… エロ豚 とはな。オバさん、訛ってるよ。僕は英姫語にしか興味ないよ。英姫はソウルっ娘だ。

「それ慶尚道方言けいしょうどうだろ?」

「いいえ、標準語よっ」

やっと戻ってきた英姫に確認すると、彼女はテキスト通りにオリョppタ と発音した。

…… ほら、見る……。

大年増はムっとして席を立って行き、間もなく達也のテーブルに山盛りのフルーツが届いた。

「オモ、たちゅヤシ。とてもたかいのチュムンした?」

「ちっ、あの女だ。タチ悪いなア」

「このプルチュかのじょおかねもらえます。ママのしんせき。みんなかのじょきらいです。かんこくごはチドツカンホステイス」

達也が辞書を引くと チドツカン!! あこぎな と載っていた。

「覚えてたくないな、こういうの。ははは」

「たちゅヤシはプジャ (金持ち) ガないでしょ?」

「ここじゃ一番ビンボウだ。月に二回、無理して三回。四回目には破産する、あははは」

英姫は達也に耳打ちした。

「無理ハジマセヨ (しないで)。みせのそとであえるよにします。」

わたしのにほんごとえいごのせんせいびんぼです。ククツ」

英姫との会話は楽しく、彼女の声は可愛いのだった。

「たちゅやし、畑中せんせどしてますか？ ママが心配してます」

「岳さんならもうここへは来ないよ」

「ウエグレヨ（なんで）？」

無窮花 に初めて来た晩、帰りに岳志は達也に言った。

「日本に来たばかりで変な虫はついちゃいねえ。英姫は掃きだめのツルだな。ゆずるよ」

「ゆずるだなんて、岳ちゃんのもんでもないだろ」

「ばあか。俺は挑戦権をゆずるって言うてるのっ。英姫をおかしなジジイどもにさらわれちゃたまらんだろが？」

……男ならだれが惚れてもおかしくない娘だ。岳さんだってまんざらじゃなかつたんだろに……。

「夢中になれるものが欲しいって言ったのは、達ちゃん、おまえだろ？ それに……」

「それに？」

「俺が言えたことじゃないが、教員の資質なんて上っ面で計れるもんか。おまえはコンプレックスを払拭しようとするから胃カイヨウになる。英語科には大先輩がいたろう？ 浪人製造機 と生徒からバカにされながら、定年まで勤めた豪徳寺寅次郎ってえらい先生がさ。人間、どんなでも生きなきゃならねえんだよ、達ちゃん。彼を見習え。英語の勉強なんてその次だ。小説を読めよっ」

「小説？」

「生き方の手本だ。俺は英姫をかなりの文学通とみたな」

(一〇)ママの誤算

英姫は支払われた給料の額に驚いた。全額ではないが人気者の英姫には指名料が面白いほど入ってきた。それは額に汗して働くのがバカらしくなる金額だった。無窮花むくんがわとは一年の契約で、期間内に辞めると法外な違約金を払わせられる。他店からスカウトされて辞めるのなら、新しい店がそれを持つから自分の出費はない。でも、それだと新しい店でまた年次契約になってしまう。

英姫は一年で当初の目標額に届かなくても契約を更新するつもりはない。大学に戻るのをそうは延ばせない。日本に来る前から彼女はそう考えていたが、英姫の貯金は無窮花で順調に増えて行った。

……お金は欲しいけど、新しい店でそうなると韓国に帰れなくなる。秀哲の学費を考えるともつと稼げる店で働こうという気もなくなはないけど、母さんと約束したしね……。

ママは眼鏡違いだっと思わないわけに行かなかった。

……楽しんで稼げる水商売に二カ月も浸ければ、ウブな娘も金の亡者になる。もともと欲の深い子や事情を抱えた子は風俗にまで落ちていく。それが。稼ぎに来たんだらうに、英姫は淡白というか金にきれいすぎる。カマトトのお嬢さまか？ まさか。この商売、稼ごうとすれば客からボラなくてならない。そうするには客をその気にさせなくてはならない、それも指名料という別口を払わせるほど夢中にさせなければならぬ。夢中にさせるには陰に廻ってサービスしなければならぬ。客も承知のことだ。ホステスは自分の身も心も客のものだと逆上せあがらせて、一度に数多くの男どもを手玉に取って一人前だ。それが水商売で稼ぐということだ。

英姫はまだ日が浅いのに指名料ではもうベストファイブに入った。でも、英姫の人気は本物じゃない。どう見てもあの娘は処女だ。男がサービスをしない女にいつまでも指名料を払うものか。する

と、あの落ちそうで落ちない風情は生まれついでのものか？ それならそれで長く店にいて男たちを狂わせて欲しいものだ。

ママはつい先日、英姫が売れっ子になるのを見越して、契約を一年から二年に延ばそうと持ちかけて英姫にピシヤリと断わられている。一年過ぎても 無窮花^{ムクホウ} で働くようなら、割の悪いパートで構わないと言った。水商売が長いママも英姫のように欲のない娘は初めてだ。

(十一) 篠山隆蔵というVIP

「お、ニューフェイスだな、ママ？」

「あら、篠山先生つたらお目がはやいのねえ。大学生の英姫です。お呼びしますか？」

「そうしてくれ。たいした美形だ。年を取ると気が短かくなってな、欲しいものはすぐにも欲しい、ヒッヒッヒ」

「いやですよお、先生。ホホホ」

フロアマネージャーのマイクの声が流れた。

「英姫さん、英姫さん。V2へお願いします」

篠山は太い葉巻きをくゆらしながら英姫を待った。

「おう、来たか。よしよし、ここに座れ」

「いらしゃいませ。英姫です。よろしくお願いします」

英姫は愛想良く微笑んで、篠山が手のひらで叩いた席についた。「ことばがまだですのでね。私、いや、店の子が通訳しますから、だれか指名してやってくださいな」

「英姫を頼んで指名料が二人分か。相変わらず細かいね、あつはつは」

英姫には二人の日本語がわからない。……酌をするだけだわ。

ことばなんか要らない……。

「社長様、サジャンニム どうじよ」

英姫は眼の前のコニヤツクの瓶からママに教わった分量を注いで、再び篠山の顔を見て微笑んだ。これだけが英姫の仕事だ。ママが韓国語で英姫に注意した。

「篠山先生は病院の院長先生よ。社長はまずいわね」

「しすれしました、いんちよせんせ」

「むふふふ、可愛いア。もつと近くに来いっ」

篠山隆蔵は韓国クラブ 無窮花 が八王子に出店して以来の客で、大きな個人病院の所有者だった。店はこの男を別格に扱う。篠山の

人脈があつて 無窮花 は潤っているからだ。医者や弁護士が多く出入りするが、みな黒塗りの高級車でやって来る。同じ韓国がついても 家庭料理の店 や 居酒屋 には見かけないVIPたちだ。達也は英姫が呼ばれていった中二階を見上げた。

この店に初めてやって来たとき、会計は岳さんに任せた。翌日、折半せうはんにしてくれと申し入れると、四万だけ手伝つて欲しいと濟まなそうな顔で言われた。 だけ と言うからには岳志が譲っているのだから、二人で十万は取られたろう。ここは高級クラブだ。店内を見回しても若い客は一人もない。若者が迷い込んだところで、料金に懲りて二度と来ないだろう。ホステスをいつかモノに出来ると踏んで通いだしても、美人で教養もあるクラブの女は高くつく。資金が続かない。いい思いが出来るのは資金の続く者だけだ。教師やサラリーマンが遊べる場所ではない。 無窮花 のホステスは粒ぞろい。人件費の安い韓国から調達してくるので、美人度は相対的に高い。それで日本人クラブと同じかそれ以上の料金を取る。韓国クラブは利幅が大きい。

篠山はこのところ鼻屑ひじきにしている純美スミを通訳に呼んで、命じた。
「純美よ、ヨンヒちゃんは何を欲しいのか聞いてやれ。そこそこ値が張るもんでもかまわんとな」

篠山の無神経さにムツとしたが、純美さすがに顔には出さなかった。……私はもうお払い箱か……。彼女は鼻にかかった声で甘えた。
「あら、パパ。通訳は無報酬じゃないんでしょう？」

美女であつてもすでに金の亡者に成り下がった彼女は名門梨花女子大で日本語を学んだ才媛だ。 無窮花 にやって来たのは、今までいた世界を見返すための金が必要からだというが、詳しいことは分からない。

「いいか、ママには内緒だぞ」

篠山は葉巻をくわえたまま、親指と人さし指をなめて三枚を純美に渡した。純美の、篠山にねだりながら英姫を見る目は 新入り

に負けたのではない」と言いたそうだが、篠山は女を使い捨てる。新しい娘を見初めれば、古い娘に容赦はない。純美は自分が入店して間もなく世貞セジユンオンニを追い落として篠山の女になったのを思い出さないわけにはいかない。役目は終わった。……それならそれで、少しでも稼がなきゃ……。純美のホステス根性が動き出した。

「弁護士の中先生がねえ、話がまとまると成功報酬っていうのがあるんですって。私が話せばさ、英姫は絶対OKだからね、パパ。もう少し色をつけてよお、ねえくん」

初物を狙う老人は通訳に頼らざるを得ない。篠山は彼女の手にさらに二枚を握らせた。

「わあ、パパア。だ〜い好きっ」

「現金なヤツだな。間違はなく取次ぐんだぞ」

純美は篠山の葉巻きを取上げて、顔を両手ではさみ、英姫の目の前で んむう〜むつ と汚い口髭くちびるの下の唇にキスをした。

……梨花女大まで出て何でこんな虫酸むしすいの走るような老人に？ 学歴不問の水商売が、欲が女を裸にしてしまう。母さんが心配したのもこれだわ。いいえ、母さん、私は大丈夫よ……。

純美がテーブルを回り込んで英姫の隣りに来て耳打ちした。

「たった一晚のことじゃないの。他の客からじゃそうは稼げないわねっ、頼んだわよっ」

「アンデヨ、オンニイ。チョコレート（絶対に）アンデッ」

「ケンチャナー」

篠山にも アンデッだめ と ケンチャナー構わない くらいは分かる。彼は純美が英姫を押し切ったと見た。

……金で転ばぬ女などいない……。老人は、さっそく通訳を人払いした。

ブースの中で篠山と二人きりになって英姫は、気を張っているつもりでも、どんどん心細くなって、泣き出したくなった。……何をされるんだろう？ 身体が硬直して思うにまかせない。老人の腕が彼女の首の後ろを這はい、大きな手が肩をわしづかみにした。英姫は

必死に身体をよじり顔をそむけて、篠山が飲もうとしないコニヤツクをゴボゴボと注いで どうじよ を繰返した。篠山は男の力で、右手を英姫の太ももの間に割り込ませ、英姫の唇を求めて口髭を乗せたがあつい唇をとがらせてきた。

ギヤアアアアー！

英姫の悲鳴が店内に響き渡った。客もホステスもみんなV2を見上げた。中二階はV1からV3の独立した三つのブースで、真ん中のV2は言わば 無窮花 の玉座だった。

達也はV席に駆け上がった。ママもすっ飛んで来た。

「せんせ、どうなすつたんですか？」

「英姫っ、何をされたっ？」

篠山に不機嫌になられてママは顔色をなくしている。

「どうもこうもないな。OKしておいて何てこった」

ママが訊いた。

「英姫、どうしたのよ。あなた、先生に何か失礼なことをしたのっ？」

「したのはこのジジイよっ。いきなりアタシの股に手を突っ込んで来てさっ。冗談じゃないわっ、スケベジジイ！」

英姫はママをきつと睨にらんで続けた。

「こういうことは絶対ない高級クラブだと言ったのはママでしょ？」

無窮花 は紳士の社交場で安キャバレーじゃない、安心よって言ったじゃないですかっ！

ママは呆れて溜め息をついた。

……水商売をやるうって娘がいつからそんなことを真まに受けるようになったのかねえ。だれだって察して、あきらめて覚悟を決めるんだ。英姫、お前はいつたい何様のつもりだい……。

英姫は息を荒げて興奮している。

「ちよいと、英姫。あんた、アタシの顔をつぶす気い？ 後でエルメスでもブラダでも好きなのを買ってもらえるからって言ったでしょ、さっき」

いつの間に現れたのか、純美が口をはさんだ。

「あれだけハッキリ断つたのに、聞こえなかったとでも言うんですかっ！ それを、まアまアとか言っちゃってオンニが勝手に話を決めたんでしょうにっ。私が日本語わからないと思ってトンデモナイ話よっ」

達也が篠山の胸ぐらをつかんで締め上げた。

「ジイさんっ、ふざけたことをすんじゃねえよっ」

「だ、だれだ、おまえは！ ぼ、暴力はよせっ。ここは貴様のような若造が来るところじゃないぞっ」

篠山が息をつまらせた。

「勝又さん、止めてっ！」

ママがすかさず身を投げて二人の男を分けた。

達也は英姫を落ち着かせようと両肩に手を置くと、彼女の頭越しに篠山を睨みつけて吠えた。

「金を払えばジイも若造もねえだろうがよっ」

「なによ、ピーピーがえっらそうにっ」

純美のことばに英姫の両肩の達也の手がビクツと動いた。達也に火の粉が降りかかると直感した英姫は語気を強めた。

「純美オンニっ、ジイさんから巻き上げた五万円をママにちゃんと説明しなさいよっ」

「えっ？」

ママの眉毛が吊り上がってキツと純美を睨んだ。

……英姫も英姫だが、純美の利権侵害は放っておけない……。

客とホステスの間を取り持って手数料を稼ぐのは、ママの独占権で店の子には許していない。

「純美っ、英姫っ、二人とも今日は帰んなさいっ」

純美は四つ折りにした五万円をポンとテーブルに放り出すと、プイツと店を出て行った。大方どこかの屋台で機嫌直しだろう。

英姫はロツカールームに入っていった。

篠山にペコペコ詫びて取りなしていたママが、達也に振り返った。

「勝又さん、英姫を寮まで送ってくださらない？　いつまでもそんな怖い顔しないで、下で待っていてくださいよ」

達也は店を出て外で英姫を待った。店内では機嫌の直らない篠山がママに訊いていた。

「あいつはどここの若造だ？　あんな不愉快なのがこの店に出入りしてるのか？」

「いえ、ほんの二、三回ですよ。榎山学園の畑中って教師が連れてきて、仲間だと言ってましたから学校の先生でしょ。あんな若い人は長く続きゃしませんよ。ほっときましょ……」

「榎山学園だと？　さっき、カツマタと言ったか？」

老人はニヤリと意地悪そうに口もとをほころばせた。

「センセもセンセ、初めての子にあれはないですよ。そのうちに何とでもしますから」

篠山隆蔵はもうママの言うことは聞いていなかった。

(十二) 無窮花 のシンデレラ

ロツカールームで収まらりきらない怒りに英姫がプリプリしていると、寮で同室の玉姫が^{オツキ}入って来た。最初の挨拶でハタチだと言ったが、二十歳の英姫の目からは玉姫はどう見ても同年とは思えない。あどけないというより明らかに未発達なところがある娘は、雑役に雇われた子が衣裳を着せられて店に出された感じで、垢抜けない。ホステスらしくない。姉さんたちから小間使いのようなこともやらされる。先輩たちが意地悪く彼女をシンデレラと呼ぶこともある。

英姫がしきたり通りにオツキオンニ（玉姫姉さん）と呼ぶと、これからもそう呼ばれないので変な感じだと言って笑った。

事実、玉姫は年齢を偽っていた。英姫がホステス寮に入った日、スツケースからパーパーバックが転がり出て、表紙のビビアン・リーを見た玉姫は『わあ、パラムグアハムケサラジダ（風と共に去りぬ）。オンニって英語が読めるんだあ、すごいなあ』と小学生のように驚いて、十八歳（それも数えで）になったばかりだとあっさり認めた。それ以来、玉姫の方が英姫をお姉さんと呼んでいる。

「英姫オンニ、ここをどこだと思っているの？ 高級クラブなんかじゃないよ。売春あつせん所よ。オンニにも事情はあるでしょうけど、店で騒ぎを起こすのはマズイわよ」

「あら、玉姫はあんなことをされて平気なの？」

「平気なわけではないけど、アタシは家に仕送り出来ればいいから我慢する……」

「な、何を言ってるのよ、あなたっ!!」

「あの篠山ってジイさんね、新しい子を見るとモノにするまでしつこいよ。アタシの初めての男よ」

英姫は絶句した。……こんな子にまで。

「アタシさ、姐さんたちみたいにブランドのバッグや服は要らないの。アタシんときはシャネルだったかな。高いものだと言われたか

ら、姐さんたちが使ってる店で買い取ってもらって、すぐに実家へ送金したよ。両親にすれば大変な金額ですもん、たまげたのよ。電話をすると『恥ずかしいことはしてないだろね』っておつかない声で言われたけど、でも、何度めかには、父さんも母さんも ありがとう しか言わなくなつた。貧乏人の娘が何をしているかくらい、貧乏人の親だからわかるんだね、きっと。アタシは姐さんたちみたいに芝居がうまくないから、すぐにお客に飽きられちゃう。でも、だんだん飽きられないようにしなきゃと思ってるの。お姐さんたちみたいに稼がなくちゃって思ってるの。化粧も上手になつてさ、芝居してさ、稼げるだけ稼いで韓国に帰って、どっかの田舎で食堂やるの。鶏カルビの店なんかいいと思うんだ。一軒屋のちゃんとしたやつよ」

「玉姫や、あなた、神さまを信じてる？」

「小学校のときから教会は行ってるけど、もう止めようかと思う」「どうしてよ？」

「神さまをね、アタシがアタシを信じられなくなったときのために取っておくの。美味しいものを最後まで取っというて食べるみたいにさ、ククッ」

「……………」

「そお、はやくタツカルビの店が出せるといいね」

「オンニもこんな所にいつまでもいちゃダメよ」

……………それは私のセリフでしょ？ あなたみたいなのがこんな所に……………。そおか、そうだよ。タツカルビの店を出すのにお金が必要なんだよね……………」

「ありがと、玉姫」

「アタシ、英姫オンニを応援するからね、あんなジイさんなんかに負けないでね。それにママの話はぜったい本気にしちゃだめよ。じや、アタシ店に戻るね」

……………あの娘が私より年下？ 高校も出てない？ 英姫はため息を吐いてコルム（チヨゴリの結び目）を解いた。

(十三) 淵上校長の悪だくみ

篠山隆蔵が校長室にいた。

「淵上君、灸のすえ方が足りんな。アイツは檜山学園には無用なダメ教師だそうじゃないか。その上、素行も改まらないとなれば、なあに容赦は要らん。学園という大の虫を生かすための小の虫は駆除せねばな。理事会は現場の最高責任者の意見を尊重するってことで根回しをしておく。君が校長になるとき、ワシは理事会の意見をまとめるのに一肌脱いだのだったな」

「はっ、その節はご尽力たまわりまして」

「どうだ、君が好きにやっついていいんだ。勝又の若造を何とかしてくれるね」

「は、何とか考えて手を打ちます」

「うむ。あの無礼者はこのワシを面罵めんばしよった。暴力を振るいよった。それより何より老人のかけがえない楽しみを奪いよった盗っ人だぞっ」

篠山を見送って、淵上校長は渋い顔した。

……老人のかけがえない楽しみか。相変らずの女好きだが、今回は今までと様子が違う。何も妓生キセン一人を勝又なんぞと張り合わんでもいいだろうに。女と引きはなすために勝又をクビにしろと簡単に言うが、あんなヤツにも組合がついている。言うは易く行うは難しだ。しかし、勝又を辞めさせないと私が危ない。ん、研修に出すのはどうだ？ いや、海外研修は有能教師を顕彰けんしょうするのでスタートしたものだ。勝又ごときにまわすお鉢はちではない。先を越されては他の教員が納得すまい。何とかヤツに詰め腹を切らせる方法はないものか……。

淵上は校長になってから、NHK第二の「朗読の時間」や「歴史再発見」を聞きながらお茶にする習慣だが、この日は時間帯が違っていた。ラジオのスイッチを入れると株式市況が流れた。何を思い

ついたか「うまく行くかも知れない」と呟いた。陰険な目つきだった。

達也はまた校長室に呼び出された。

「教師たる者、誤解されるような行動は慎めと言ったろうが。まともな授業もできやせんのに、なんでキーセン遊びだけは出来るんだ。ええっ?」

「ですから、噂は本当ではなくて……」

「君のお遊びで学校中が実害をこうむるってことが分からないのか」

「どういうことでしょうか。噂は事実無根で、先日もプライバシーだと……」

「うちは公立校じゃない。私立は噂ひとつで浮き沈みするんだ。根も葉もない噂で株価が上下するくらい君にもわかるだろっ」

「それはまア、そういうことも……」

「キーセン狂いの教師がいるとなれば、来年の入学志願者はガタ減りする。そうだなっ」

「……………」

「噂はそのまま実害だろっがっ」

淵上校長はこめかみに血管が浮き立たせてまくしたてた。

教員の採用は教科のベテラン教員が複数当たるが、承認するのは校長だ。

「……………」
今まではそれで問題なかった。しかし、今になってキーセン狂いを雇った責任を面接担当の教員になすりつけても解決しない。部下の責任は校長の責任。私は理事会で吊るし上げられ、校長の職を追われよう……………」

淵上校長のことはもはや教養ある人のものではなかった。

「君はまだプライバシーなどと青臭いことをっ!」

「校長は僕にどうしろと……………」

「どうしろもこうしろも、学校が立ち行かなくなったら、君なんぞ

に出来ることがあるものかつ。君の噂で学校が窮地に立たされてるんだ。学校は被害者で、噂の張本人の君が加害者だっ」

「そ、そんな筋の通らない話が……」

「とにかく私にこれ以上君の噂を聞かせるな。猛反省を促しておくっ」

校長はどっかと椅子に腰を下ろすと達也を見ずに手を伸ばしてドアを示した。

開かれた校長室が校長の方針で、ドアは文字通りの開けっ放しだった。二人のやり取りは二十名が働く事務室に筒抜けになった。

(十四) 七十六日目

英姫は達也の出費を気づかって、二人は木曜日の昼間に会うことにしていた。私立学校では土曜日も授業をする学校が珍しくない。櫻山学園の教員にも日曜日以外に各教科ごとに決められた研究日があった。達也が英姫に英語と日本語を教えて、英姫が達也に韓国語を教えるのが木曜日だった。

英姫は 無窮花^{ムゲンカ} を一歩出れば、街にあふれるジーンズにTシャツ姿の大学生と変わらない。そして二人はどこにでも見かける恋人どうしだった。二人はこの日もありふれたファミリーレストランで言葉を教え合った。

達也は英姫が誤解するのを恐れて少しためらったが、自分のことは二人のことでもあるので、やはり知らせておくほうがいいと思った。

「ねえ英姫、近ごろ僕のまわりの様子が変わんだ。嫌な噂が立ってさ。RUMOR」

「ソムン(所聞) マルスミンデヨ(のことですか)?」

「ネー(そうさ)」

達也は辞書を引いて うわさ を指差した。英姫がその指先をおし退けた。チョッチアヌンソムニピジョッタ^{チョッチアヌンソムニピジョッタ}よからぬ噂が広まった、という例文がのぞいて見えた。彼女は顔をしかめた。

「僕がキーセンに夢中なんだとさ」
「まっ」

英姫の唇が震えた。達也といるときの彼女には 無窮花 は頭がない。思いがけない話題だった。日本人が韓国人売春婦の意味でキーセンと言うことを知っているだけに、英姫にはショックだった。「誤解するなよ。僕は君のことをキーセンなんて思っちゃいないんだから……」

達也の慰めはうれしかったが、英姫は慰められる自分が悲しかった

た。浮かない顔で辞書をめくっていた英姫の顔に明るさが戻った。

「タチゆヤシ、じしょキョファンしてあげますっ」

「キョファン？ ムストウシエヨ（どういう意味）？」

「エクステンジしましょ。ここ見て」

彼女の辞書に、ソムネイリリシンギョンスジマ＝噂をいちいち気にするな、という例文が載っていた。

「あっはっは。クマリマジャヨ（その通り）だね」

「わたしのじしょがすばらしいでしょ」

「そうだな、噂なんて気にしなきゃそれまでなものな」

二人は笑った。

「君に会つと元気になれるよ。そ、人の噂も七十五日さ」

「どして、ななじゅうじ日？」

「ことわざだよ。現代の僕らに役立つってくれる古人の知恵さ。僕らは七十六日目が来るのを待てばいいんだ」

(十五) 婚約指輪

- 「たちゅやシは英語どうやって勉強したですか？」
- 「勉強なんかしないよ、工夫したのさ」
- 「コンブ(工夫)は日本語で勉強ではないですか？」
- 「強^しいて勉^とめるのは僕の性に合わない。ベンキョウは好きじゃない」
- 「でも、英語の先生でしょ？」
- 「結果的にそうなったんだ、あははは。自分に合ったもの学習するのが一番さ。教科書は僕に合わなかった」
- 「どうやって英語を覚えたですか？」
- 「大学に入る前に米軍基地で働いてた」
- 「それで英語が上手ですね」
- 「G Iが昇進試験のためにみんな同じ本を必死で読んでた。『ワードパワー・メイド・イージー』っての」
- 「どんな本ですか？」
- 「一回十問のクイズ。語源の組合せで単語を覚えさせる本さ、ペーパーバックだね。それをG Iからもらったんだ」
- 「そのG I、試験に合格したですか？」
- 「ああ。本が良かったのか、本人が努力したのか知らないけどね」
- 「合格したなら興味ある本ですね」
- 「うん。今度いっしょに買いに行こう、君にプレゼントするよ。本格的なものもあるけど最初は易しいのがいいよ。語学はやったぶんしか身につかないからね、正直なものさ。ことばは決して人を裏切らない。英姫はどんなふうに英語をやってる？」
- 「自分に合わない教科書で、ククツ」
- 「ははは。で、やっぱり英語の先生になるのかい？」
- 「結果的にそうなりたい、ククツ」
- 二人は笑い合った。

二人は映画を見た。買い物もいっしょにしたし、ボーリングもやった。英姫の休みには相模湖へドライブもした。二人は会うのが楽しい恋人どうしだ。

……英姫は一年だけ日本にいて、また韓国に帰って大学生になる。勉強好きな彼女は復学して先生になるだろう。彼女が韓国で教師になったとき、僕はどうしているだろうか。英姫がいるだけで僕の生活はこれまでになく充実している。でも、英姫が日本にいるのは仮りでしかない。彼女がいなくなったら？ 達也の心は締めつけられた。……もし、英姫も僕と同じ気持ちだというならためらってはいけない。彼女の気持ちを確かめるために、僕から気持ちを伝えよう。英姫が帰国する前に母さんに会わせよう……。

達也は一人で八王子駅前の ジュエリー・ナガミネ に入った。

「指輪のことはまったくわからないもんで……」

彼は薄い髪を目の細かい櫛でなでつけた店の主人に話しかけた。

店主は金属の輪がいくつもついた束と刻み目のある金属棒のゲージを取出した。

「これです。このシーからエルまで測ってください」

達也は『ワードパワー・メイド・イージー』をカバンから取出した。この本を英姫に買ってやったとき、彼女はうれしそうに本を胸に押しあてた。彼女の指は 完全版 を意味する *complete* を隠していたが、語末の *ete* が指からはみ出していた。フランス語の「夏」がたしかそんなだったと思い出したのと、そのとき彼女がきれいな指をしていると改めて思ったので記憶にある。

店主は輪をじゃらつかせて幾本かを表紙に当てながら言った。

「九号ですね。後で多少は調整はできますから一〇号にしますか。これだけはどうもご本人様にお出でいただきませんと」

「そうですね」

ショーケースの中どの指輪も英姫の白い手に似合いそうで、達也は迷った。

「婚約指輪って誕生石と合わせるもんですか？」

「アメリカの宝石商組合が決めたものですのでね。由来は聖書にあるとか言いますが気になさらなくていいと思いますよ。婚約指輪を喜ばない女性はいません」

達也はプラチナ台のエメラルドを選び、英姫の指にきつと似合うと思った。

(十六) 夜明けの女神

英姫は学資稼ぎの日本で、まさか恋をするとは思っていなかった。……達也さんはいい声で話す。韓国語はまだ下手だけど、日本語も英語も彼の声を聞いているだけで楽しい。あの声は私の心にまでしみ込んで来る。彼はやさしい眼差しで私の心を捉えて放さない。……韓国に帰ったら、私は達也さんのことを忘れてしまうのだろうか。復学して大学を出て、社会人になって、新しい恋をして、結婚して、幸せな生活がこの人を忘れさせてくれるだろうか。考えただけで心が顫える達也さんみたいな人が私の人生に、また現れるんだろうか。私の心はすでに達也さんと同居を始めてしまったようだ。なんで日本を一年限りなんて決めてしまったんだろう。なんで韓国に帰らなければならぬんだらう……。

英姫の休みの日に達也は、相模湖で夜景を見て来ようとドライブに誘った。彼は仕事帰りで、すでに夕刻だった。甲州街道を西に進むレンタカーの助手席で英姫の心は乱れた。

……いったい何を遠慮してるのよ、おかしいわ。達也さんも私も、お互いに遠慮しあってるのが、これほどありありと分かっているのに、どうして戸惑うの。どうしてためらうのよ……。

「富士山は遠いですか？」

「河口湖か。今からだと帰れなくなるかもしれないよ」

英姫は微かな声で言った。

「トラガゴシプチャナ」

……帰りたくないって？

達也はアクセルを踏んで追い越し車線に出た。

二人は河口湖畔のホテルに泊まって、翌朝は夜明け前に甲州街道を東に戻った。英姫は頭を達也の肩を持たせかけて微睡んでいた。

英姫の顔が金色に輝き出して、達也は肩を揺すった。

「英姫、見るよ。オーロラだ。夜明けだよ」

「ははは、やだ。オーロラは北極でしょう？」

「黄金色のアウローラはローマ神話の夜明けの女神さ。金の元素記号は？」

「Au」

「な？ 僕は黎明れいめいの女神に一生を捧げる身になった。女神は後悔してないだろね？」

「バカなこと聞かないで」

…… 一生を捧げるですって？ 私は昨夜のことを結婚と結びつけて考えたのではなかった。私は後悔しなくなかった。達也さんと何事もなく別れるようなことになれば、むしろその方を、この先、後悔するだろうと思った。あんなことをしなきゃよかったと思う日に、私が今より幸せなはずがない。達也さん、あなたは私の今の幸せをずうっとこのままにして、幸せの格好をした不幸を寄せつけないでくれると言うのね？

「バカなことって、英姫い、バカがバカなことを言ったただけだから少しもおかしいことないだろ？」

達也はにこにこしながら前方を向いたまま運転している。

「もう、いやっ」

英姫はうれしかった。今までに、こんなにもうれしいことがあつたらうか。二人の乗るレンタカーを、行ったことのない地中海に浮かべたヨットのようと思った。じよじよに昇ってくる太陽を反射してキラキラと黄金色にさざ波だつ海面を想像して幸せだった。

…… オーロラよね、達也さん……。

(十七) 変容する幸福観

ホステス寮の自室で英姫は考えた。

……私は日本にいてのに韓国を離れた気がしない。復学の費用を稼ぎに日本に来ていたのだ、それ以外に私が日本にいる理由はない。そう帰国の当日まで自分に言い聞かせて過ごすものと思っていた。でも、そうしなければならぬほど日本の生活が辛い。順調すぎて緊張感の糸が切れてしまったのか。どこか安心しきついている。復学して勉強についていけるのかという不安がまったくもないのも不思議といえば不思議だ。韓国語を教えれば日本語も英語も教えてくれる先生がいる……。

先生？　と言いつつ直して彼女はふふつと笑う。

……達也さんは私の先生じゃないわ。少しも厳しくないし、先生なら女を幸せにするわけじゃないもの。自分が女でよかったと思うのも達也さんの愛を受入れてからだわ。英語教師の夢を捨ててはいないけど、勉強への集中力は確かに落ちてきた。でも、日本に来る前と違って、私は今の私を責める気になれない。頭の中で　こんなじゃだめよ　と言う声がする。すると次には別の声が　なぜ英語教師になりたいの　と問いかけて来る。それに答えようとすると　教師になつて幸せになりたい　という答えしか出て来ない。教えることの充実感は幸せの一つには違いない。でも、形は違っても達也さんとのことを考えている今が決して不幸じゃない。トゲトゲしくガムシヤラに勉強しなくなつて、心がこんなに満たされて来るじゃないの。達也さんはあと半年、^{ムゲンファ}無窮花の契約が終れば、私と一緒に韓国に行くのよ。そして母さんに挨拶と結婚の報告をするのよ。これが幸せでないなら何が幸せなの？　達也さんは私と話すために韓国語を始めたわ。「太古オキナに言いありき」の言いつて、そこから愛が育つていく何かを言ったもののような気がする……。

英姫はエメラルドの指輪をくるくる廻しながら取り留めなくそん

なことを考えた。

しかし、娘を日本にやるのは断腸の思いだと言った母のことを考えると、英姫の心は曇ってくる。

……日本に来てすぐに男とつき合い出して、半年そこそこで結婚まで決めてしまった娘を母はどう思うだろう。 お金より、復学より大事なものを見つけたのだから そう喜んでくれるだろうか。母さんにわかってもらうには誤解のないように私の気持ちの説明できなくてはならない……。

日中の熱気で生温くなった水が流れる八王子浅川の岸边。店に出る時刻を気にしながら落ち着かない私に目をつぶらせて、達也さんは私の指に指輪をはめた。そして目を開けた私に言った。

「僕らはお母さんを騙すわけじゃない。報告が早すぎると逆に心配するだろ？ 半年後に契約が明けたら、すぐに僕は君のお母さんに会う。僕の実家ならまったく問題ない。それは言い切れる」

そう言っただ也さんは私の肩を抱き寄せた。

「本当に僕でいいね？」

秋風が立って、容赦ない陽射しの残暑が忘れられた頃、英姫は達也に連れられて千葉に住む義母になる人を訪ねた。彼女はたまの休みに達也と出かける所はどこも楽しかったが、この日はさすがに緊張していた。群青色とクリーム色のツートーンの総武本線は達也の故郷の佐倉市さくらに向かっていた。

「クイシン（鬼神）でもトツケビ（お化け）でもない、少しうるさいけど普通のおばさんだよ」

「そうじゃなくて……」

「何さ？」

「私の母にも分かってもらわなきゃいけないことだけ」『ちゃんと考えたのか？』と言われると、うまく説明できないのよ。達也さんと知り合ってまだ半年よ。後先あとさきを考えない向う見ずな女と思われなにかしら。私がホステスだって言っただけでいいのじゃあ？」

「あゝ、隠しても仕方ないからね」

「きつと無分別なはずっぱ女だと思われるわ。私、なんで今日、来ちゃったのかしら」

「ウチの母さんはそんなこと思わないさ。会ってみればわかるよ。僕が心配してないんだから、君は心配してない僕を信用すればいいんだ」

玄関に出迎えた母親の早苗は、面影が達也に似ていた。英姫は少し安心した。

「初めてお目にかかります。英姫です」

「まア、あなたが英姫さん？ コマスミダ」

「……？」

「ひどい田舎でしょ、コマスミダ」

「……??？」

「お口にあつかしらねえ、コーヒーはインスタントよ、コマスミダ」
「……??？」

早苗は初対面のわずかな時間のうちに コマスミダ を連発して英姫を困惑させたのだった。

そおお、じゃ、お父さまは亡くなられてえ、コマスミダ。

お母さんはご健在なのね。早くお会いしたいもんだねえ、コマスミダ……。 英姫はニタニタ笑っている達也の上着を引っ張った。

「私、困るわ。お義母さまはなぜ ありがとう ばかり言われるの？」

「何事にも感謝 するのがおふくろの口癖でね、 コマスミダしか教えてないんだ、あっはっは」

「お義母さまをバカにしてるの？ とんでもないわっ。いやよ、私、そっいうのっ」

英姫が怒った口ぶりになって、早苗が心配しだした。英姫は説明した。

「お義母さま、達也さんはバカですっ」

「え？」

「コマスミダは ありがとうございます。 そうですか、そうですね
は クロツチヨ と言います」

「駒墨田 って言ったら間違いないって達也が言うもんだから
そう 黒千代 って言うの？」

「こらあつ、達也つ。 おつまえ親に恥じをかせせてっ」

早苗はおおげさに拳を達也に振り上げて、笑った。

「おまえなんかよりこちらの娘さんの方がよっぽど先生だ、黒千代
つ。 英姫さん、駒墨田」

英姫は初対面の早苗に親しみを覚えた。……すてきな方だわ……。

「達也、先様ちんさまにはいつご挨拶に伺うんだい、私もいつしよに行った
ほうがいいだろ？」

「いいよ、僕ひとり。 半年先」

「こついうことは人を立てるのが筋つてもんだよ。 だいじょうぶか
ねえ……」

(十八) 韓国の親戚

英姫の家の近くの韓式料亭に親戚と名乗る十数名が押し掛けた。ほとんどが年上の男たちで、達也は異様な圧迫感を感じていた。教員の社会的地位は日本よりも高い。学校の先生ということとで親戚の者たちにも受入れられた達也は、良枝の前に両手をついてオンドル部屋の床に額をすりつけた。

「それにしても日本は遠いねえ」

良枝がしんみり言っていると、彼女の甥だという男が快活な声をあげた。「俺は仕事でしょっちゅう行き来するけどな、日本くらいわけねえよ」

「ばか。良枝は寂しいって言ってんだよ。おまえってそんなことも……」

別の声があった。そしてまた年配の男の声。英姫の伯父にあたるジョンチヨル貞鐵氏だった。

「娘を嫁に出す親はだれしもそうしたもんさ。でも学校の先生なら良枝も大船に乗ったも同然だな」

達也はこうして少しずつ声をかけてもらいながら英姫の夫になっていくのだと思うと、いちいちのことはに身が引き締まる思いがした。彼は夏休みの終わりに韓国で一度、日本の彼の田舎で、秋にもう一度結婚式を挙げるつもりだと説明した。

「姉さんとなら何度結婚しても構わないですよ」

弟の秀哲がスチヨルそう言って集まった皆を笑わせた。親戚の屈託のない笑い声は達也には何より有り難かった。秀哲はことばを続けた。

「短期間でよくそこまで韓国語を覚えられましたね」

「君を弟にするために必死でした。おかげで専門の英語をずいぶん犠牲にしましたからね、君の大学受験の手伝いは出来ません」

集まった男たちは達也の答に喝采し、彼を囲んでの酒宴が始まった。親戚になる男たち口々に達也の仕事のことや将来のことを聞い

ては酒の肴にした。英姫から話がどのように伝わっているのか、かねて承知なのか、将来のことは尋ねても英姫とのなれそめを聞き出すとする者はなかった。

「義兄さん、受験勉強があるので、僕はこれで」

秀哲はこの集まりの立役者だった。達也は年若い秀哲がこの国で一番の味方になってくれるだろうと直感した。

「あ、今日はありがとう。座がなごんで助かったよ」

部屋を予約した旅館に向かうタクシーの中で、緊張を解かれた達也は、機嫌よく英姫に話しかけた。

「あれだけたくさん押し寄せて来るとは思わなかったなア」

「あら、私の家なんか少ないほうよ。式の当日には女も子供も来てもつとふえるんだから、驚かないでね」

「心の準備はしておくよ」

「キサニム（運転手さん）、ここで停めてちょうだい」

宿にはまだ距離のある場所で英姫は達也にタクシーを降りるよう促した。

「達也さん、私たちの写真とりましたよ」

「写真？」

「決まってるじゃない、私たちの結婚式の写真よ、ククッ」

「ぼくらの結婚は夏だよ……」

「いいのっ。ここよ」

スタジオ・オリオン という名の写真館だった。

「予約した姜英姫よ。さっそくお願いするわ」

写真屋の夫婦は慣れた手つきで二人に王朝時代の宮廷衣裳を着せさせた。達也は、胸元の大きな金色の四角い枠に龍を刺繍したつやつやした青い外套を着させられた。頭に黒い冠、手に笏しやくを持たされた。いにしえの王様がまたたく間に出来上がった。

写真屋の親父は達也の眼もとが赤いからと、ファンデーションを塗り付けた。

お妃は支度きさくに手間どっていたが、やがてあちこちに金の鳳凰が縫い取られた赤い重たそうな服を着た英姫がカメラの前に出てきた。頭に女の拳ほどの金色の花冠フタクワ冠。両頬のまっ赤なまん丸いパッチが何ともマンガ的で、達也は思わず吹き出しそうになった。ヨンジという花嫁の印だそうだ。この国の庶民たちも結婚式の時だけは豪華な宮廷衣裳を着ることが許されたのだという。

「明日の昼にソウルを発つ。キャビネ版で二枚焼いておいてちょうだい」

(十九) 空港の別れ

英姫は金浦空港に達也を見送った。三日前、成田からの飛行機がここに着いたときには新婚気分だった英姫も、出発便のアナウンスを聞いた途端にポロポロと涙をこぼした。

「何だよ、永の別れみたいにさ。ゴールドデンウィークにも、その後も、夏休み前に何度も来るんだから。これっきりみたいにな泣かれ方されたら僕だつて帰れないよ」

「達也さん、帰らないで、お願いっ」

意外な英姫のことばだった。彼女は達也の両肩に手をかけままた下を向いて嗚咽をこらえていた。達也は英姫のアゴを持ち上げて自分の顔を見上げさせた。

「君らしくない無理を言うんだな。僕が帰るのは君を迎えに来るためだから」

「ごめんなさい。こんなに甘ったれで涙もろいなんて自分でも思わなかった……」

「じゃ、だいじょうぶだね、英姫」

英姫はやつとうなずいた。

……離れるだけで幸せまで逃がしてしまつような気持ちにさせられるのだろうか。新婚の妻の心細さだけのことであつてくれればいいが。結婚式の写真といい今回といい、英姫は僕の感じないものを何か感じとつているんだろうか……。

売店で 雷おこし のような菓子の詰め合わせを土産に買い、達也は英姫を振り返らずにゲートを通った。駆け戻って彼女を抱きすくめたい衝動があつて、振り返つて手を振る自信がなかった。

……あんなことを言う娘じゃないのにな……。

水色にわずか黄が混じつたようなKAL機は搭乗口をぽつかりと開けて達也を迎え入れた。シートベルトを締めて窓からのぞいた空港ビルはどこかに英姫はいる。しかし、どこにいるのかはもう分か

らない。エンジンがギーンと重く唸ってタクシングのスピードが上がる。達也の目にジワツと涙が滲んで来た。

……不安になるのは愛し合っているからじゃないか。僕らの愛がほんの少し試されるだけだよ……。

榎山学園高等部の職員休憩室のテーブルに達也は韓国菓子をひろげた。ちよつとした旅行などに出た教職員たちがいつもそうするように「お召し上がりください」とメモを添えた。

昼休みに達也は休憩室に行ってみた。だれも手をつけない菓子折りは開けたままの形で残っていた。こうした菓子は授業の合間々々に少しづつ着実に減って昼までには空になるのが通例だった。しかし雷おこしは一つも食べられなかった。……毒入りだとも言うのかよっ……。達也は菓子折りごと部屋の隅のゴミ箱に投げ込んだ。

(二〇) 解雇通告

篠山隆蔵がまた校長室に姿を見せた。

「淵上君っ、家内に先立たれて十五年、七十歳のこのワシが余生のすべてをかけようと決めた女だぞっ。それをあの勝又の若造めが韓国に逃がしてしまいおった。即刻クビにしろ、いまいまいっ」

淵上は篠山副理事長の憤激ぶりに思わず体を震わせた。

……たかが妓生^{キセン}一人を思い通りに出来なかつただけでこれか。勝又にも困つたもんだが、依怙^{いこじ}地になつた老人はどんな諫言^{かんげん}にも耳を貸すまい。そして私の立場はますます危うい。やはりもうひと押しせにやならんか……。

篠山老人が帰つたあと、校長室に呼び出された達也が棒立ちになつて目を閉じていた。

「あれだけ言つたのに、また君が妓生^{キセン}と居るところを見たという話だ。学校としてもいよいよ考えなくてはならん」

まさか。一体だれがどこで見たというんだ。僕はもう無窮^{ムゲン}花^{フタ}には行つてないのにおかしいな。学校をサボつた生徒にでも見られたのか。店を一步出ればジーンズTシャツの英姫がなんで妓生^{キセン}に見えるんだ……。

「今度も信頼できる筋からの情報で、噂はますます広がっていると言つてきた。学校としては一刻の猶予もない。君は再三の私の忠告を無視してきたのだから、覚悟は出来ているだらうな」

「覚悟……?」

解雇ということばが達也の頭のなかをぐるぐると駆け巡つた。激しい動揺の中で彼は冷静になろうと自分に言い聞かせた。

……うるたえるな、落ち着け。噂されているのは僕でも、僕が立てた噂じゃない。その噂で職場を追われるなら、被害者は僕で、学校が加害者じゃないか。恋愛も結婚も憲法が認めた個人の自由だ。僕は間違つてなどいない。それをトカゲのシツポ扱いしやがつて。

さつさと厄介払いしてサバサバしたいわけか……。

「僕には実害が出ているとは思えません。僕も組合員です。これは不当解雇で事件になります」

「何い？ 校長の私を脅すのかっ」

「僕が脅していると言つなら、僕をして脅さしめているものがあるのでしょうか？」

「屁理屈はいい。被害が出る前に善処するのが私の役目だ」

「僕の人権を無視するのを善処といいますか」

「もうたくさんだ。とにかく君がアテにする組合は君の味方ではない」

「え？」

「組合だって実害が出たときのことをまっ先に考える。生徒数が減つたら組合員にも死活問題だ。だれだって自分が可愛い。学校がなくなつて組合だけ残るつて法などないつ。噂とお化けは出てからじや手後れなんだよ。学校は体面だ、人気商売だつ。それを人権、人権とバカの一つ覚えか？ 君は学園の品位を傷つけたのだぞ。性行不良で改善の見込みがないなら退学だ、と生徒手帳にさえ書いてあるつがっ」

人の集まる所どこへ行つても中傷する人間がいる。噂に効き目があると知っているからだ。そして結局、世間という姿を見せない敵は 火のない所に煙は立たない と締めくくつて 悪評の張本人は学校から追い出せ と結論する。

校長と示し合わせていたのか、岡本主任が現れた。いやな予感がありました。

「君だつて一人の我がままのために教職員一五〇名を犠牲にしているとは思わないでしょうか？ こんな状況になつても、まだ身を退こうという気になれませんか？」

岡本のバカていねいな口調に達也は苛立いらだった。岡本にすれば、自ら面接に臨んで達也を雇つた五年前にさかのぼつて 失敗 を挽回するチャンスに恵まれたわけだ。岡本主任はねちねちと責任を果た

そうとした。

一五〇人の生活か……。閉じた目のなかで五色の霧が濃く流れ出し、達也は吐き気がしてきた。

「勝又君ね、依願退職ということならわずかですが退職金も出ます。私からも口をかけてみますが、どうです、予備校を当たってみては？ 英語科としては君に英会話担当の非常勤を考えていますから、それも頭に入れといてください。いえ、無理には申しませんよ」「非常勤……」

岡本の話はナイフのように達也の腹をえぐってきた。

(二十一) 失意の中で

……結婚どころじゃない。英姫は、いや、先日集まった親戚一同のだれひとり納得すまい。しかし、こうなったからには、英姫にだけは事実を告げて結婚の延期をわかってもらわなければ。週末にも韓国へ行くこう……。達也は生きた心地がなかった。

達也が半月も経たずに再びソウルの家を訪ねたことに、母親の良枝は胸騒ぎを覚えた。義母になる人にろくな挨拶もせず、達也が駆け上がった英姫の部屋から、やがて、拳で激しく床を叩く音と号泣がもれてきた。良枝は階下の仕事場でそれを聞いた。……やっぱり……。

英姫の泣きじゃくる声を背にして、達也は、入り口に立った良枝の足元に平伏して詫びた。

「申し訳ありません。結婚を少し延ばしてください。お願いします」

口惜し涙がポタポタと床に落ちた。

「アイゴーツ。何の恨みがあつてアンタは私の娘を騙したんだっ！」
達也は良枝から頭やら肩やらを何度も拳で叩かれた。それが少しも痛くないのがつらかった。良枝は廊下に坐りこんで英姫と同じように拳で床を叩いて「なんで騙した」と喚きつづけた。

母親は奥の部屋に引きこもったきりもう出て来なかった。

「ごめんよ、英姫。うつつ」

達也は堪えきれずに英姫の胸に顔を埋めてむせび泣いた。

「私たちがどんな悪いことをしたと言うのよ……」
英姫は惚けたように達也の髪をなでた。

噂は更にひどくなった。教職員たちは達也のキーセン遊びが高じて韓国に通っているのだと校内のあちこちで噂した。その噂をかい潜るようにして彼は韓国の英姫に会いに行くのだった。噂は事実

なつていった。

達也は職探しも始めなくてはならなくなった。予備校をいくつも駆け回った。予備校で要求されるのは、学校以上に難解な文章を文法的に解説する技量で、直感的な実用会話ではない。それでも達也は必死に何度も面接と筆記をくり返した。

「勝又のやつがよオ、ボクの通つてる塾の塾長と話してるのを聞いたぜ」

「なんでお前の塾へ？」

「櫻山学園の先生がウチのような一流予備校へ、なアんで皮肉言われてやがんのさ。アイツ、うちの塾を受けて不採用になったんじゃねえのオ。あつはっは」

達也は陰口に屈辱を感じているヒマはなかった。状況は予断を許さない。七月半ばに夏休みを待つて、達也はまたソウルへ飛んだ。

貞鐵伯父が達也ににじり寄った。

「一体どうなつてるんだっ。私らをバカにするのもいい加減にしろっ」

「……………」

「もとはと言えばお前だ、良枝っ。英姫を日本の水商売などに出しおつてっ。弟が草場の陰で悔し泣きしとるのが見えんのか、ええっ。こんな男はさつさと日本へ追い帰せ。わしゃ帰るっ」

伯父が義母を面罵する剣幕に、達也は胆を抉られる思いがした。

彼の腹の中は実際、ズキンズキンと痛んだ。その腹を抱えて伯父を追いかけた。

「貞鐵伯父さん、話を聞いてください。必ず何とかしますから、お願いです」

「女房一人を養えんおまえなどと話すことなどないわい。失せろ、ウエノマ（倭奴め）！」

倭奴ウエノマという日本人への蔑称を聞いて、達也の思考が停止した。脚から踏んばる力が抜けた。英姫の家へ戻り、良枝に声を掛けたが、プイツと横を向かれてしまった。

「うおおあーっ」

達也は狂ったように道路に飛び出して行き、そこに洗面器に一杯ほど茶色い液体を吐いた。吐血だった。腹の中の重苦しかったものがなくなつて、気分は悪くなかつた。体が宙に浮くような感じがした。達也を搬送する救急車の中で、英姫は冷えた彼の手を泣きながらさすっていた。

「血圧、六十つ」

救急隊員の声が遠くに聞こえ、彼は意識を失った。

達也は病院で目を覚ました。英姫は両手で達也の手を包み、額でそれをベッドに押しあてて眠っている。

「目が覚めましたね、学校には私が連絡しときましたよ、ミス・カスマタ。飛行機を遅らせるのはこのお嬢さんが手続きしました。あと二日はこの病院にいてください。英文カルテのコピーを差し上げます。日本で引き続き加療してください」

主治医は日本語を話した。

……学校に連絡した？ また噂に……

英姫が目を覚ました。

「達也さん、何度も韓国へ来れないね。飛行機代も……」

無窮花に較べれば安いものさ。そう笑えた時期はとうに過ぎた。

「お金がもたないでしょ。私は大丈夫、電話してくれば。私、待つから、待てるから。韓国の女はやわじゃないわよ。達也さん、お酒少しにしてがんばってね、がんばるのよ」

英姫のことばに達也はベッドで男泣きした。……生涯この女をばなすまい。でも、どうやって……。

(二十二) 岳志の障書

「達ちゃん、玉姫をどう思う？」

岳志が聞いた。

「玉姫つて 無窮花ムクゲ のか？」

「達ちゃんが大変なときに聞くことじゃねえんだけどさ」

「どういっつもりさ、岳さん」

「どういっつもりつて、そのつもりに決まってるだろ」

岳志は本気らしい。達也はことばを選んだ。

「うーん、玉姫ねえ……。悪い子とは思わないよ。けど、幼くない？」

「わかってるよ、達ちゃんの言いたいことは……」

「わかってるなら何で、そのつもりなんだよ？ ヤケでも起こしたのか？」

「俺は達ちゃんとは違うよ。なあ、この世の中で俺しか知らねえことを知りたくねえか？ 親父もおふくろも知らねえ、いや、医者は

知ってるが守秘義務つてやつだ。なア知りたくねえか？」

「……話すなら、聞くよ」

「俺な、達ちゃん。やるのはやれるけど子供は出来ねえんだ。無精子症」

「まさか、悪い冗談は止めるよ」

「冗談でこんなことを言うかよ。子供を作れるなら、飲みに通つて女遊びなんかしてねえさ」

達也は岳志の突然の告白に何も言えなくなった。美食家で女好きなのは知っていたが、そう言われてみると、たしかに岳志が飲み食いと女に注ぎ込む金は半端な額ではなかった。

「何年前だったかな、女に『アンタの子が出来た』って語られてよ。墮おろす金を都合しろと来やがった。相手はしたたかな女だし、そんなヘマをやるとも思えねえ。掘よん所ねえことなっちまってよ」

「そうか、岳さんはカトリックだったよね、たしか」

「それさ。話が本当なら認知しなきゃならねえ。崖つぶちからまっ暗な谷底へ飛び降りるみてえな心境で『産めっ』って言ってやった。すると、女は途端にしどろもどろになって『子供なんか産むつもりない。だから金が要るんだ』ってわめきやがった。『俺の子かどうか調べてからでも遅くねえだろう』って言ってやった」

「当然だ」

「行ったよ、大学病院で血液から何から徹底的に検査した。それで無精子症がわかったんだ」

「ふうん」

「『ふうん』じゃねえよ。わかっていいこととそうじゃねえことがある。自分の子を好きな女に産ませられねえんだ。女に家庭を約束できねえんだ。人並みの幸せってやつが奪われてんだ。刹那的にもなるうつてもんじゃねえか。理屈じゃねえよ」

「そうかも知れないけど……。それと玉姫と何か関係あるん？」

「あの娘は他の女とちがう。俺を満たすんだ、癒すんだよ」

「すまん、話がよくわからんが……」

「男と女は自分にも相手にも期待があるからつき合っただろ？」

「そりゃまあ、そうだ」

「商売女は男なんか期待しない。期待するのは男のフトコロだ。素人女はそれが逆だな。俺にしてもよ、相手に期待を持たせといて裏切るってのは信条じゃないからな、素人女には手をつけねえことにしてたんさ」

「してた？」

「英姫を達ちゃんに譲ったのは俺にしたら上出来だった。それまでの俺だったらよ、たかがホステスに遠慮なんかするもんか。でも、英姫は素人だったからね、家庭を持って幸せにならなきゃいけないのよ」

「……………」

「俺もどぎつい性悪とばかり付合ってきたからね、それで玉姫が新

鮮に思えたのかも知れねえ。玉姫はあの通りの娘だ。頭が足りないからウソがつけねえ。その意味じゃ神様と同じくれえ信用できる。俺は気が安らぐ。ナニをやるやらねえの先に何かがある……」

「玉姫の方は岳さんをどう思ってるんだい？」

「さアな。俺は玉姫の障害につけ込むヤツらからは守ってやりたいと思ってるのさ。まっ先に俺がつけ込んでいるのかも知んねえけどもよ、あっはっは」

「言いくいけど言わせてもらおうよ。岳さん、この先、彼女に不満を感じるようなことがないって言えるかい？」

「世間のモノサシじゃそうなるだろな。でも、そうなったなら、それは俺のせい、玉姫のせいじゃない」

……これがエピキュリアン・岳志の正体だったのか。世間は個人を理解したいように理解してしまふ。そして世間が理解だと思ふものの多くがこうした誤解なのだ。岳さんは無精子症が判ったことで、物事に対する洞察を深めたんだろうな……。達也はそう思った。

岳志が玉姫のことを相談すると、神父は『将来をよくよく考えて自棄になるのは止めなさい』と忠告し、玉姫との結婚に賛成しなかった。岳志の目には神父も、どこにでもいる俗物だった。岳志は玉姫と同棲を始めた。岳志は信仰を持ち続けたまま、教会を離れた。

(二十三) エンドレス・ラブ

母親の良枝は英姫と達也の結婚は待つまでもないと見限って、英姫に内緒で電話番号を変えていた。何度電話しても現在不通の録音テープばかり流れるのを不審に思った達也は、良枝の^{ヤン}仕事場にかけてみた。

「達也です」

と名を告げたとたんに電話を切られた。

……母親の仕事場にはつながるのに家の電話が不通？ 英姫を電話に出させないためだ。嫌われた。英姫の実の母親だけにシヨックは伯父のとき以上だった。達也は良枝を恨んでみた。が、立場を入れ替えれば、定職のない男など同じに扱ったろう。玄関はおるか勝手口まで閉じられてしまったては打つ手はない。達也は、英姫が早く気づいて彼女から電話して来るのを待つほかなかった。

一方の英姫は、有らぬ噂を立てられて針のムシロで耐えている達也の、せめて邪魔になるまいと電話を遠慮していた。達也から電話があったときに励ましてやろう。英姫は今は試練の時期なのだと素直に思っていた。

達也が檉山学園に出講するのは週に二日だけになった。学校からの電話もまったく無くなった。惨じめだった。専任教諭から非常勤講師へ、蜘蛛の糸がプツンと切れて地獄へまっ逆様のカンダタだ。経済が破綻した。貿易会社にでも就職すればどうにかなるかも知れない。

しかし、達也は予備校や塾ばかりを探し歩いた。彼は檉山学園の非常勤を犠牲にする仕事は考えなかった。予備校や塾で専任になるつもりもなかった。『非常勤でも学校の先生は先生です。達也さんが悪いわけじゃないんだから、誤解はきつと解けます。噂なんかには負けないで学校の先生を続けてね』と英姫から哀願されたことが頭

から離れないのだ。英姫は自分が教師を目指しているせいか学校にこだわった。教員への漠然とした憧れと尊敬がじゃまをして、非常勤の情けなさは実感できなかったのだろう。はたちそこそこの娘に、男社会、いや、実社会に仕掛けられる汚い罠のことなど知る由もなかったのだ。達也はそんな英姫の幼い思いが愛おしくて、常識的にはおよそ賢くない選択をした。それほどに英姫と切り離されるのを恐れた。達也は榎山学園非常勤講師の立場に甘んじた。

生活が一変した達也を、岳志がアパートに訪ねてきた。ずかずかと上がり込んで、テレビの上の写真に向かってガクつと頭を垂れた。

「英姫、すまんっ」

達也が初めて英姫の家を訪ねたときに写真館で撮った婚礼衣裳の写真だった。

「達ちゃん、電話どうしたんだよ。ちっともつながらねえじゃねえか」

「英姫のおつ母さんに電話番号変えられちまってさ、ムシヤクシヤしたんでコードを引っこ抜いたまんま、ははは」

達也のやることは意味がない、岳志は呆れた。のほほんとしてるようでけっこう感情的だ。

「英姫から電話があったらどうするんだよ？」

「ないよ。もうまったく。で、今日は何の用で来てくれたんだい？」
岳志は持参した一升瓶の口を開けて達也にすすめた。

「くそ、副理事長の奴ア化け物だな。タヌキだかヒビだか、どっちにしても人間じゃねえやつ」

「副理事長って？」

「うちの学校の篠山隆蔵だよ。ダミーの理事長を操って副理事長に収まってるアイツに決まってるだろがっ！」

「篠山……？」

「三カ月前に心臓発作で倒れて、今じゃ死にぞこないだよ。年甲斐もなく英姫に横恋慕しくさって、挙げ句にや達ちゃんをハメやがったバチが当たったんだ。ざまア見ろい、化け物めっ」

「ハメた？」

「達ちゃん毎日学校に来なくなったから知らねえだろう。篠山がぶっ倒れてからこつち、達ちゃんのキーセン話なんかこれっばかりも出ちやいねえのさ」

岳志は人さし指を親指ではじいた。

「PTAや校外にまで噂が飛び交つてると校長が盛んに言いふらしてたる？ でも、町のどこを歩いてもそんな話はまったく聞かねえ。副理事長に脅かされて校長の野郎が仕組んだにちげえねえが、証拠がねえんだよ」

岳志のことばに達也は肩を落とした。

「遅いよ、岳さん。僕は退職したんだ。あちこちで半端な仕事をやっても収入は学校のときの半分。英姫とのことはもう無理だよ」

「達ちゃん、俺が代りに英姫のおっ母さんに会って事情を説明するよ。英姫にも会って早まったことはするなって言っただけよ」

岳志は意気込んだ。達也を焚きつけたのは自分だと責任を感じているようだった。相変わらずの男気だ。

「岳さんの気持ちはありがたい。でも、状況がこうだから、僕もボチボチ頭を冷やさなくちゃ」

「たいして良くもねえ頭なんか冷やしてどうするよ。本当にそれで気がすむのかあ？」

「ああ、すむよ。すませるよ」

.....

「達ちゃん、（生活が）大変だな.....」

「ああ、アパートが新しくなって家賃あがったしな。能無しはそのうち野たれ死だな、ははは」

達也は力なく笑った。

派手なもの何ひとつない部屋を見回して岳志は本棚の一冊を手にとった。英文のリルケの選集をパラパラとめくるとメモがはさんであった。達也の筆跡だった。

暁子

ぼくに 終わりのない 愛の歌を 残して
はなればなれの 暁子よ
ぼくは知っています
ぼくの声が きみに届くの
ぼくの歌を きみがよろこぶのを
ぼくは知っています
それを ぼくに 歌わせるのも きみがぼくの
いのちのいのちだからだと 知っています

ぼくらは ぼくらの一生を まっすぐに 暮らすのだから
きみの足音が この部屋に 聞こえたら 暁子よ
今度は 二人しずかに 語らいあおう
だから 言ってください 「わたしは居ます」と
「ぼくはここにいます」

はなれてある 苦しみのなかで 今 ぼくは
きみの そばにすわれる ひとときを 求めます
うつろな部屋で きみを 想うときです
静寂のなかで きみとぼくに 呼びかける ときです
ぼくらがぼくら自身に たどり着けなかつたなどと 悲しまないよ
うに
ぼくらが いつまでも 暗く寒い戸外に 待たないようにと
太陽が 黄金の粉を まき散らす 朝が早く来るようにと
ぼくは ぼくらの 愛が成就する 朝を待ちます
待つことが そのまま 祈りだと

姜英姫 烈女

愛は 尊大な者の 求めに応じない
それでも ぼくの心は なお一つの叫びをあげる

きみをほしい きみだけをほしいと

望みに 心を疲れさせ 待っているのは ぼくだけではない
ぼくの祈りに きみを呼ばずとも ぼくを愛する きみは
いつも ぼくを 待っていてくれるので
あらゆるところに きみを 感じられます

だから 言わないでください
ぼくらの前に 何も見えないなどと
ぼくらの道は どこにあるのかなどと

きみを想うと なぜ ぼくの生命がざわめくのか
夜に祈り 朝に希望を抱く ぼくへと立ちかえるのが
そのまま きみのもとへ 帰ることなるように

遠い二人を近づけて 愛を契らせた 存在が
朝の小鳥の 姿で ささやき 訊ねたら 言ってください
「ぼくらは 要るものと 要らないものを 分けたのです」と
まぶしい光を 眼にたたえて そう言ってください
これが きみへの ぼくからの ことづてです

詩は大きなx印で消されていて 投稿しない。もっと明るく愛し
たい と書かれてあった。失敗作か。……達ちゃんに女？ 岳志は
題名が気になった。

「なんで詩なんか書いてるんだ？」

「あ、それ読んだのか？」

「悪かったか？」

「別にい。貧乏人の道楽だ。金はかからないし閑ひまだしね、ははは」
「金の方はやり取り出来ても、時間はそうは行かねえよ。達ちゃん
に頭と時間を使わせて、幸せもんだ、この娘は……」

「だといいいけどな、ふふ」

「だれだよ、暁子って？」

「岳さんも知ってる娘さ」

「知らねえな。彼女ができたのか？」

「できるわけねえだろ。英姫だよ」

「なんで英姫が暁子なんだよ？」

「ちよつとした事情があるんさ」

……ま、いい。この暁子がああ英姫なら、達ちゃんはどうなになっても終われない恋をしているということだ。愚直な男だ。羨ましくなるほどのバカ正直だ。こんな達ちゃんをあいつらっ……。

岳志がぼそつと言った。

「目算があるわけじゃねえけどな、出来るとこまでやってみっから。しばらく臥薪嘗胆つてのをやってくれ。すまん、この通り」

岳志は座ぶとんを外して両ひじを床に突っ張った。

「やめてくれ。なんであやまるんさ。僕がグズだったただけだろ……」

(二十四) 英姫の決心

達也の電話が間遠くなるのは日本で頑張ってくれているからだと思姫は思っていた。それにしても間隔があきすぎる。家からかけても公衆電話からかけても達也の電話はつながらなかった。

英姫は結婚式のあるはずだった夏をうつうつとして過ごした。物思いにふけてばかりで、まったく口をきなかった。家の小さな庭をぼんやり眺めては、だるそうにため息ばかりついた。庭の隅の無窮花はまだいっぱい蕾をつけていて、秋半ばまで色とりどりに咲きつづけた。無窮花に代わってコスモスが咲き出したころ、英姫にようやくひとつの決心が生まれた。

英姫は一年半振りに母校のキャンパスに立っていた。

……懐かしさがこみ上げて来るのかと思っただけで、そうでもないのね……。

正門から見える校舎のビルはどれも彼女の目には小さくしか映らない遠景だった。

……私が日本へ行ったのはここに帰って来るためだった。夢だった英語教師になるためにここで勉強した。幼い恋もした。でも、私にはここでの思い出は要らない。私はこれから私の信じた道を行かなくてはならない。感傷に浸ってはられない……。

英姫は文学棟の学生課で、退学手続きの書類に淡々とボールペンを走らせた。四十を過ぎた女事務員がいかにももつたいないと言いたそうに「復学もできるんですよ」と言った。

「こちらに日語科があれば、そうしたいですけどね……」
「二年次までは全部単位は取得されていますから、書類が必要なきはご連絡ください」

英姫は事務員に目礼して学生課を後にした。校舎にもそこで学んだものにも未練はなかった。

……来年の受験に間に合うかしら。とにかくやってみるしかない。達也さんも苦しいのだから連絡がなくても仕方がない。だれが何と言おうと達也さんは私をだましてなんかいない。みんな、今に見てなさいよっ！

「母さん、私の貯金ある？」

「手付かずで残ってるよ。どうするの？」

「大学を受け直すことにしたわ」

「復学じゃなくてかい？ 新しく入るにや足りないだろ？」

「いいの、国立を受けるから。ソウルじゃなくて地方の」

「やっぱり英語を勉強するの？」

「いえ、日本語よ」

あつけらかんと英姫が言うのを聞いた母親の良枝は、まだ懲りてないのかと心の半分で呆れ、ずっとふさぎ込まれるよりはマシだろうという気持ちで残りの半分の埋め合せた。

英姫はその晩から猛勉強を始めたが、四カ月の勉強で受かる国立はなかった。しかし、英姫が決意をひるがえすことはなかった。翌年、再挑戦して、清州国立^{チヨンジュ}大学校文学部日語科に合格した。同級生よりも四つ年上の大学一年生だった。

英姫の大学合格を知った貞鐵伯父が家にやって来て、良枝と話していたが、英姫の入学を祝つてのことではなかった。

「英姫も、もう二十三だろ。今度の大学で必ずものになるとも言えまい？ また途中で止めてもしたらどうする？ あれだけの器量だ、若いうちに嫁にやる方がいいだろうよ」

英姫は、事が済んでから何か言い出す伯父が好きではなかったが、良枝はそうでもないようだ。達也との結婚話がダメになってからは、伯父とウマが合うように見えなくもない。

……英姫がどう思っているかと、もうあの男とは一緒にはさせられない。だからと言って、この人の話に乗ってしまうと、ウチの事

情などお構いなしに、本家がどうのシキタリがどうの言い出しては引つ掻きまわす。英姫を日本にやったときがそうだった。韓国を發つた後になつて『なぜ相談しなかつたか。金なら都合をつけたのに』と責められた。今回だつて破談になつてから『わしは最初から賛成しちやいなかった。日本人など信用なるか』と言つて来た人だ。

英姫は私の娘、夢は叶えてやりたい。学校の先生になりたがつていた娘が再挑戦を始めたばかりじゃないか。でも、日本に出してあんな馬の骨を連れて来たのだから、甘やかし過ぎたと言われても仕方がない。当てにできない伯父にうっかり頼ろうとする自分に良枝はあわてて首を振つて考え直す。

英姫は少し痩せたようだ。十八で大学生になりたての頃の子供々々としたところがなくなつた。英姫の勉強する姿を見ると良枝は我が子ながら勉強好きな娘だと思ふ。貞鐵伯父のように日本語など勉強のうちに入らないなどと反対すれば、あの娘の将来を閉じてしまふことになる……。いや、英姫は同じ過ちは繰り返さない娘だ……。

(二十五) 短い結婚生活

岳志は八王子の韓国教会であわただしい結婚式を挙げた。質素というより他なかった。達也は新郎の介添え役をつとめた。玉姫側からはホステス時代の仲間だった池善子チンジャが出てくれた。この教会の信者には水商売の者が多かったので、教会有志のエキストラをたのんで何とか格好をつけた。

岳志は身内も、職場の人間もだれ一人招待しなかった。玉姫の両親も、事実のほどは分らないが、高齢と健康上の理由で不参加だった。

達也は厳粛な気持ちで出席した。無精子症の新郎、発達障害の新婚。神は二人にどんな祝福を与えるのか。

式はとどこおりなく進み、締めくくりに牧師が言った。

「お集まりの皆さんのなかに、この結婚に反対の方が居られますか？ 居られましたら申し出てください。私もは式は挙げますが、二人を結びあわせ給うたのは我らの神です。反対の方は居られませんか？」

……反対するにも何も関係者は僕と善子シンジヤの二人じゃないか。牧師さんも形式通りに進めなきゃならないんだな……。

「これでお二人は神の前にご夫婦です。これより先、神の御業に異を唱えてはなりません。では、お二方、誓いの接吻をどうぞ」

岳志はいきなり玉姫をがばつと抱いて濃厚なキスをやり始めた。みな呆気あっけに取られた。

「ち、ちよつと、あなた、何もそこまで……」

牧師は岳志の肩を叩いて、顔をしかめた。そして、下を向いて「ぐふっ」と笑いかみ殺したおかしな声を出した。

達也は、牧師に似合わない不謹慎な笑い方だと思った。

新郎新婦が列席者に振り向くと今度はエキストラたちが大笑いした。岳志の口のまわりは玉姫の口紅でまっ赤になっていた。花嫁も

同様だった。ひとり達也だけが笑わなかった。

「私たちがバカに見えますか？ でも幸せにも見えるでしょう？」

岳志は赤い口でそう言い、自慢そうに玉姫の肩を抱き寄せた。エキストラたちから拍手がわいた。達也だけが涙を流した。

結婚式の前日に、岳志が一升瓶を持って達也のアパートを訪ねていた。

「達ちゃん、明日は迷惑かけるけど、よろしくな」

「結婚が決まってから聞くのも変だけどさ、岳さん、ずいぶん急いでいない？」

「ああ、急ぎてえ訳もあるのさ」

「玉姫が妊娠したとか？」

「ばあか、冗談言っつな。それだけはねえよ。じつあ、玉姫のやつは白血病でもう長くねえ」

「ええっ」

「あいつとつき合い出したのは、英姫と達ちゃんがソウルに発つのを駅に見送ったときで、二年前だ。英姫が言ったな、『何かあったら畑中先生に相談するのよ』って」

「うん」

「寮で英姫によくしてもらってたんだろな。帰り道にあいつは『オソニのいなくなった部屋にはどうしても帰りたくない』とダダをこねやがった。ホテルに誘うとあいつはすんなりついて来た。俺たちは男と女になった。翌朝、仕事の俺は床に脱いだズボンを探したが見当たらねえ。はいてなきやおかしいパンツもねえ。玉姫を揺り起こして聞くと、『靴下と一緒に昨夜洗った』って言うんだ」

「最初の晩にそれかい？」

「あゝ。『いっしょにいてくれてありがとう』ってな、『面倒かけたから何か出来ることをしようと思った』んだとき。シーツの下からズボンを取出了したら、寝圧しに失敗してシワだらけ。俺もすれっ枯らしばかりを見て来たからな、愛ういやつじやって思ったんさ。失

敗を気にして『ごめんなさい。叱ってください、お願いします。叱ってください』ってしきりに謝るのさ。変な娘だと思ったね。習って覚えたのか地がそうなのか、ますます玉姫が愛かなしくなってきたなア」
岳志は遅刻を気にしながら、ペコペコ頭を下げる玉姫を慌たたく優しく、もう一度抱いてから、生乾きのパンツの上にシワだらけのズボンをはいて、何年かぶりですがすがしく誇らしい気持ちで出勤したのだと言う。

「ふうん。そういう家庭的な娘なら結婚したがるだろうし、子供だつて欲しいがるだろ？」

「あゝ。結婚するには自分の心は相手のために無防備でなきゃいけないえ、とかみ砕いて説明してさ、お互いに一番の秘密を打明けるところにしたのさな。俺は無精子症だから子供は出来ないと教えた。初めのうちはキョトンとしてたが、そのうちに泣き出したな、泣いて泣き疲れて言ったな。『先生の子がアタシみたいなバカじゃ困るから、これでちょうどいいんだ』ってさ。神様がそう決めたんだそうだ」

「で、玉姫からは何だつて？ いや、僕は知らない方がいいのかな」
「『いっぱいあつて、どれが一番か分かららない。でも、一番言いたくないのは』とまた泣き出した。はあつ。玉姫の最初の男はウチの副理事長だとさ。入店と同時に手込めにされたんだとよっ」

「な、何だよ、それはっ！」

「俺は頭に血が上つてさ。気づいたときには玉姫を怒鳴りつけてた。頭の中を篠山の野郎の嘲笑が駆け巡った。人に殺意を持ったのは後にも先にもあのとさだけだ。この俺を信じて一番聞かれたくないことを話したのにさ、玉姫にしてみりゃ俺にたまされたと思ったかもなあ。『許してください、勘弁してください。畑中先生と結婚出来なくてもいいから、許してください』って謝るんだよ、俺に。結婚出来なくていいなら何も俺に謝ることじゃねえ。『先生とこうなつてやっと忘れられるところだったのに、思い出せつて言うんだもの。アタシがどれだけ困ったか分かりますか？』って真剣な眼で聞かれ

てさア」

「そんな」

「いや、今は落ち着いてるさ。玉姫は俺と知り合っただのが初めての幸せだったんだな、のろけじゃねえよ。朝から晩までうれしそうに家事ばかりやってる。借家を磨いても無駄だっていうのに、アパートをピカピカに布団をふかふかにする。あいつには自分だけの楽しみってのがねえ。あるのは俺を快適に暮らせることだけだ。」

そのうちに玉姫は『貧血らしい』と言うようになった。朝もつらそうにしていることが多くなった。嫌がるあいつを無理やり医者に連れて行つた。医者は紹介状を書いて、大学病院に入院を勧めた。白血病だと言われた」

「……むごい」

「入院はさせたい。でも、もって半年と宣告されたからには玉姫の望むようにさせたい。でも彼女の頭がどう考えるかと思うと、俺には病名を教える勇気がない。自分の好きな事やってくれるのが一番なんだがなあ。でも半年が一ヶ月、一週間しか残ってなくても、動きまわって俺の世話を止めないよ、あいつは……」

「それで玉姫ちゃんにしてやれることが結婚だったのか……」

「親父は俺の身体のことなど知らねえからな。今どき流行らねえ義絶、勘当ってんだから笑わせる。戸籍を汚すつてさ。三十過ぎの男が勘当されたくれえでビクつくもんかい。憲法二十四条も知らねえで人の親をやるなつてんだよ、ははは」

「……。岳さん、身体のことを親父さんには言わなかったのか。やっぱり言わないよな、岳さんなら、な」

「不幸を親子二代で背負い込むこたアねえさ。そんなこと言やア、親父は切腹するよ。ご先祖さまに申し訳ねえつてな」

「……………」

「で、戸籍を独立させて玉姫を俺の戸籍に入れた。あいつが死ぬまではせめて俺のそばで生きて欲しいのさ。『俺たちのママゴトみてえな新婚生活は楽しかったよなっ』つて送ってやりてえのさ」

「うっ、うっ、岳さんっ」

玉姫は岳志と結婚して半年後、夫ひとりに看取られて死んだ。自分を少しも不幸だと思わずに死んだ。

岳志がやっとな無宗派の墓地を買ったといっているので達也も行ってみた。

「達ちゃん、俺みてえに死に別れてこともあるんだ。音信不通つても蛇の生殺しだけど、希望がねえわけじゃねえと思うよ」

「あゝ」

「俺たちや、どうなっちゃてんだろな、まったくよ」

茜色に染まった西空を見上げて、岳志は玉姫を、達也は韓国の英姫を想った。

(二十六) 英姫の二重日記

英姫は日本語で日記をつけた。少女が架空の恋人に宛ててそうするように手紙文にした。たとえ手紙は届かなくても、手紙を書くのにかけた時間は、純粹に相手を思った時間だ。それを相手に捧げて、自分の手を差しのべられるだけ差しのべて相手とつながりたいという幼い信仰だ。英姫がそうした少女たちと違うのは、受け取り人が日本に実在する男だということだ。彼女は達也とつながっていたために、呼びかけの多い手紙を書く。

勝又達也クイハ、私は達也さんを育てた日本語がどうしても習いたくて、今、清州大学校日語科の一年生です。会えなくなっても達也さんは私の一番大事な人です。達也さん、ことばの競争のこと覚えてますか？ 私は日本語を勉強していると達也さんのアパートで後ろから肩を抱かれています。達也さんがそうしてくれたように、私も達也さんのために日本語を勉強します。私たちの ことば はきつと愛に変わっていきます。達也さんも韓国語を続けてください。達也さんのことだもの、きつとそうしてくれてますね。英姫オルリム

だれにも見られない英姫の日記は達也宛てに書かれる。風邪をひかないように気をつけるのよ、夏バテしないでね、と遠い息子を氣遣う母親だったり、恋人の部屋で、からかわれるのがうれしくてたまらない、と息づかいが聞こえるほどの距離で甘える少女だったりする。花屋で季節には早い花を見たことや、夕食のおかずのことで母親とささいな口論をしたことも日記に書かれた。英姫は達也に歴大な時間を捧げ、日本語で彼への愛を支え、ハングルで自分を支えた。どこを開いても達也を慕う手紙、そして合間に宛名のないハングルの走り書き。日記は彼女が日本語学科を卒業した後もつづいた。

達也さん、今日、仁川の私立女子高で採用試験の面接を受けて来ました。面接をなさった先生が、私の少し複雑な学歴について尋ねられました。浪人を含めて三年のブランクのことです。迷いましたが、結局、正直に日本のことも話してしまいました。面接の先生は「ご苦労なされましたね」と言ってくれましたが、結果は分かりません。達也さん、私の幸運を祈ってください。とにかく一段落、ほっとしてます。

面接を受けた女子高のトイレでナプキンを換えながら谷川俊太郎の詩を思っていた。生理を詩にするなんて。少女はしゃがんで待つ、だったか。血を滴らせて同じ痛みを耐えていても、タツヤを知った私は少女のように漫然とは待てない。すっぱかされた待ち呆け女なのかと思っただけで下っ腹より先に心が出血してしまう。タツヤ、迎えに来て。 私たちが別れたままでいてどうするのよ！

達也さん、石川達三という作家の『人間の壁』上中下の三巻を買いました。日語科の先生から薦められたのです。(ススメルはどの漢字を使うのか未だに迷います)彼女は日本人の教員ならたいてい読んでいるだろうと言われました。達也さんは読みましたか？ 長篇なので私は机の上に三冊重ねたまま未だ読み始めていません。雑事に追われています。立派な教師像が描かれているのでしょうか。達也、私は作者が達也さんと同じ漢字だったから買ってしまったのだと思います。

噂などにへこたれず頑張って教師を貫いてくれと泣いて頼んだことが仇になったのか。タツヤの苦しみが薄らいだのか増さったのかすら伝わって来ない。私はあのと結婚をすんなり行かせよう(もちろんタツヤを失いたくなくて)彼に教師でいて欲しかったのではないのか。日本人だからと反対されてもタツヤが教師であれ

ば説得できるといわずに計算が働きはしなかったか。私は本当に教師になりたかったのか。タツヤの教師という立場を一匹の女になつて手に入れようとしていたのなら何と醜いエゴだ。自分が嫌になる。

達也さん、このごろ貞鐵伯父がやたらと見合い話を持ち込んで来て困ります。あの人は私が達也さんの妻であることが分かつてないのです。始末が悪いです。同じことが達也さんの身に降りかかりませんように。私は達也さんと結ばれたことをずっと誇りに思っています。

貞鐵伯父の眼にタツヤは過去完了形。私のタツヤは現在、それも進行形。私は成春香^{ソチユアン}*を気取っているだけなのかな、やっぱいいえ、タツヤ、フィクションじゃないわ。私はあなたを愛して、ここにいるのよ。(*『春香伝』のヒロインで貞淑な韓国女性の鑑)

達也さん、いよいよ明日は私の初めての授業です。どんな子供たちと会えるのか楽しみですが、やはり不安の方がずっと大きいです。達也さんも最初のときは今の私と同じ気持ちだったのでしょうか？ 高校二年生の日本語を担当します。がんばって来ます。

生徒たちが日本語をやるのは教科として与えられるからで、明確な動機や目標はなさそう。一人の生徒から「先生は何がきっかけで日本語を勉強されたのですか？」と聞かれた。一人の男を好きでいようと思つて始めたと言うわけにも行かなかつた。結果的に教師になつている私。その生徒の面だちと年齢で無窮花^{ムゲンソウア}の玉姫^{オツキ}を思い出した。元気で鶏カルビの店の女将さんになつてることだろうが、思い出が年をとつてくれないので、私には哀しい玉姫しか見えてこない。玉姫は私のことを思い出すことがあるだろうか。

達也さん、今日は歴史の教師から口説かれました。驚かせてしまったなら御免なさい。でも、ご心配には及びません。安全距離は保っています。彼が誤解するような魅力が私にあるとすれば、それは達也さんのものです。私が無意識のうちに誤解される（物ほしそうな）表情をするのは、達也さんのことを考えているときなので、自分でもコントロールできません。私の意識は彼をはつきりと拒みません。彼が私を口説いてもどうにもなりません。ここでも私に心を決めた人があるのを信じない人たちがいます。困ったことですが、こんなことがあると余計に達也さんのことを思えるので却^{かえ}っていいのかも知れません。達也さん、私をあなた以外の男から守ってください。

タツヤからの消息がない。それでも時間は過ぎて行く。言い寄られてまんざらでもない自分に戸惑う。彼は職務に忠実で悪い人ではない。ただ、日本人に対する偏見を当たり前のように思っているらしい。単純に私か彼のどちらかが別の学校に移って夫婦共稼ぎし、安定した幸せな家族を頭に描いただけだろう。この国ではまじめな教師ほど日本人に偏見を持っている人が多いが、そう思うのも私の偏見かも知れない。偏見は狭量さ。私の初めての男が日本人だったと知れば、狭量な男は根掘り葉掘り聞き出さずにはおくまい。私から進んで日本人に身を任せた事実はそのメンタリティーを破壊するだろう。無縁な人と一緒になってまで凶々しく教師をやっているよとは思わない。自ら招いた状況だし、大好きなタツヤとのことだもの、だれが後悔なんかするもんですか。

達也さん、達也さんも見た家の庭のムクゲが今年も咲出しました。わたしもやっぱり韓国の女です。次々に蕾^{つぼみ}をつけ咲いていく無窮花^{むくげ}を見ると、私も頑張らなきゃって思うの。八王子の無窮花^{ムクゲ}は嫌なこともあったけれど、達也さんと出会わせてもらえたことだけは感謝できるようになりました。人間は嫌やなことはどんどん忘れる

から思い出は美しいのだと言う人がいます。そうなのかも知れませんが。達也さんは私の美しい思い出の中で今も元気に跳ね回っています。夢の中でもいいです、もっと姿を見せてください。もっと声を聞かせてください。

私に八王子でのごことがなかったなら、私はもっと幸せだったんだろうか？ いつも答は出ないのだけれど、ぼんやりタツヤのことを考える。一人の男を色々な角度から分析して、総合成績で人が好きになれたらどんなに楽だろう。そうなればタツヤは落第するだろうな。でも、そういう考え方をすると、人が何で（何を目的に、何を根拠に）生きているのか分からなくなってしまふ。私にひとつだけ分かるのは、私をここに生かしている同じものが日本でタツヤを生かしているという実感だ。人間の中心にあつて人間を動かして来たのは、小賢しい学問や善悪のあやふやな常識ではない。人知を超えて働いてきた力だろう。人間は心がその力に共鳴した瞬間を忘れてはならない。その瞬間こそが永遠なのだから。タツヤに初めて会ったときの力が私を引きずっていく。いったいどこへ……？

達也さん、先日、日語科の先生（大先輩で美しい日本語を話される女性です）から日本の文芸同人誌を借りて読みました。投稿された『暁子』という詩に『だれにも話さなかった君のことばをくれぼくのをあげる ぼくらは同じことばを話そう』と言うのがあつて私は涙が出ました。さっそくパクリました。『英姫のことばをくれ ぼくのをあげる ぼくらは変わらぬ愛を語るう』どうですか？

地球上に何十億の人間がいようと、私といっしょに暮らすのは限られた少数でしかない。神さまは高慢な人間たちをこらしめようとバベルの塔を壊したという。以来、世界に散らばった民族は異なる言語を話しているのだと。日本語の教師になつても私には日本人の心まではわからない。外国語を習うことが神さまの意思に反し

ているからか？ まさか神話時代じゃあるまいし……。聖書には『太古に言ありき』と言う。その言はヘブライ語でも古代ギリシア語でもないメタ言語で、ことば以前のことばだ。私はそれを『眼差し』と解釈したのだった。そうでないと私とタツヤとの出会いは説明できない。言を信じる私は眼差しだけでタツヤを愛せる。私にはその自信だつてあるのに。

達也さん、昨日の詩は無名の人なのだそうです。先輩の話では、その人はもう十年以上も『暁子』という題でしか書いていないそうです。それを聞いたらなんだか、改めて達也さんとの別れを突きつけられたようで切なくなつて、先輩の前でまた泣きそうになりました。心のなかで無名詩人を応援していただけに……。「大した量でもないから都合のよいときに私の家に来て、拾い読みしたら」と言つてくださいました。近々お言葉に甘えるつもりです。

だれを恨もうとも思わないが、どうして私は英姫でしかなくて暁子ではないのか、いささか口惜しい気がする。無名の詩人は暁子にあふれるほどに『眼差し』を注ぐ。私は暁子に嫉妬しているのか、それとも詩人とタツヤを競わせて、音信のないタツヤを責めているのだろうか。タツヤ、この詩人は罪つくりです。私はタツヤに会いたくてたまらない。抱いてください。

達也さん、学校の食堂のうどんは美味しくありません。いっしょに食べた「讃岐うどん」美味しかったよね。作った人の力が口の中でわかったものね。達也さんの舌も力強かった。あらっ、何てことを！ でも取り消しません。これも英姫です。

生身の自分をうらめしく思うのは思考が感覚にその座を明け渡すときだ。呼び起こされた感覚は本能と結託してどこに走り出すか分からない。職場では堅いとしか思われていない私が、授業の空

き時間にトイレに駆け込んだことさえある。くまのプーさんのシヨーツを見るとつい買いたくなるのは、タツヤとの最初のときのことと関係なくはないだろう。

達也さん、悲しいお知らせです。三日前、母が逝きました。私と秀哲の二人きりになりました。母の晩年の幾年かは結婚しない私をかばうようになっていましたから、親戚と私のわがままの板挟みで切ない思いをさせました。母は達也さんのことで後悔することがあったようですが、責めないでくださいね。母が母なりに私のことを考えてのことですから。『そんな修道女みたいな生活しててどこが面白いかねえ』とよく言われました。でも、母が幾分かそれを誇りにしていたのを私は知っています。一度しかお会い出来ませんでした、が、やさしいお義母さまはお元気にしていらっしゃいますか？

母と娘が生きる時間の差はどうにもならない。電話の一件では私は一週間も眠らず半狂乱で母に喰ってかかった。弟の秀哲がいなかったら、私は自殺か発狂していただろう。受験勉強そっちのけで弟は私を心配した。『姉さんを見ていると何が人間の幸せなのか分からなくなる。だれにも姉さんの邪魔させずに義兄さんを思わせやるのが幸せかも知れない』と大人ぶったことを言ったものだから私は可笑しくなって大笑いした。私は自分の声でこの世に呼び戻された。恐らくあのときの私の「狂気」を理解したのは秀哲一人だけだった。二人の子供の父親になった今でも、その考えは変わらないと言うから頼もしい。秀哲、私はタツヤと初めて見つめ合ったときから実はもう一人ではなかったのよ。雷に撃たれた人間には正気と狂気の差なんてありはしないのよ。

達也さん、学校の生徒たちは陰で私のことをオールドミスと呼んでいます。そんな年齢になりました。彼女たちは知りませんね、私が達也さんの妻であることも、どれだけ達也さんから愛されている

かも。達也さんの韓国語も進歩したから知っているでしょう？ オールドミスノチヨニヨの古い言い方は老処女ノチヨニヨという残酷な漢字です。良かった、達也さんに愛してもらえて。寒くなりました。厚めのセーターを出してください。

モーターパッサンの『椅子直しの女』もテニスンの『イーノック・アーデン』もそうだ。ハッピーエンドの『春香伝』ならなおさら絵空事だ。待つ女 のどこがそんなに面白いのか。そんな女の何を美しいと言うのか。架空の人物とは言え、同じ待つ身の私には作者が彼女たちをもてあそんでいるように思える。この世には何百万、何千万の 待つ女 がいるだろう。騙されて 待たされる女 はそれ以上かも知れない。彼女らは貞淑なのかバカなのか。いずれにしても疑ったら待てなくなってしまう。待てなければ、すぐ後を追いかけて来る幸せも女を素通りして行ってしまふ。人間はいつから待つ事を覚えたのだろうか。

達也さん、今日パソコンを買って来ました。まだよくわかりませんが、インターネットはなかなか面白いです。 勝又達也 を検索したら、社会学論を研究されている大学の先生のサイトだけしかありませんでした。同姓同名は韓国よりずっと少ないですね。私の達也さんを見つられないパソコンにはまだまだ進歩の余地がありますね。

インターネットには必要な情報がない。面白い偶然を次々に提供してパソコンはヴァーチャル世界を作り出す。職場の同僚のなかに家人に内緒で 出会い系 を楽しんでいる者がいる。四等、五等しか当たらないクジみたいなことになんてあんなに夢中になれるのかな？ スカよりはましというのも現実的な考えではあるけれど……。

勝又達也様、貴男は今、日本の何処におられますか。今朝ほど教

頭先生から内示があり、私どもの学校の教職員十三名が東京の私立
檜山学園高等学校を訪問することが決ったようです。日語科の私が
一行の通訳を依頼されました。学校経営法の研修とデジタルデー
タの収集とのことですが、旅行日程を見ると箱根温泉泊とあるので、
予算を使い切らなくてはならないのかも知れませんが。団体の中でど
れほど自由がきくものか分かりませんが………。寒さ厳しき折お
身体ご自愛くださいませ。畏。^{かしこ}

届かない手紙を書くのに倦んだのか、日本に行くので落ち着
けないのか、今日のタツヤ宛はふざけている。北風の吹く浅川の岸
辺も風情はあるだろう。タツヤとコートの腕を組み合って歩く自分
を想像しながら、京畿道々立図書館の片隅で私は泣いた。今まで怖
くてどうしてもできなかったが、日本に出かける前に、と思って日
本の私立学校の教職員名簿をついに閲覧した。檜山学園のページに
タツヤの名前はなかった。これをどうして私が責められよう？ ま
たタツヤを少し遠ざけてしまったような気はするが、タツヤは私に
向って歩いてくれていると信じている。その足をさするうにも私の
手が届かない。もどかしい。私は一人で思い出の浅川の川原を歩い
て、あのベンチに座ろう。『あなたの心が忘れなにかぎり 思い出
の地に あの日の風が吹いてくる』とあの詩人は言う。

(二十七) 淵上校長の悔悟

篠山隆蔵の葬儀は、冷たい雨の降る十一月末だった。篠山総合病院の医師たちに混じって棺を霊柩車に運び入れた後、校長の淵上虎治は合掌して一礼をした。

「梶井君、私の校長も今年度限りだ。君も校長補佐をやってきたから大方察しはついていようが、校長というのはな、現場の最高責任者ではあっても学園のトップじゃない……」

「はあ？」

「校長は上に立つのではなくて間に立たなけりゃいかんよ」

「はあ？ はあ……」

「生徒と学校、PTAと学校、理事会と学校、教育委員会と学校、OBや支援者たちと学校……みんな学校の代表として相手の言い分を聞き流して乗り切らにゃならん」

「はあ」

「私には十七年間を校長で過ごして残念でならないことが二つある。記録に残らぬとは言え、我らが檉山学園学園史にこの私がつけてしまった汚点だ」

「はあ、何のことでしょうか」

「二つとも校長就任から何年でもない頃のことだ、君も覚えていよう？ 国語科の畑中君な、彼が生徒らに風俗嬢との睦みむつみあいを話して聞かせたとき、私は問答無用で彼を吊るしあげた。彼の真意を質ただしもせずにPTA側に立った。間に立つべきだった。クラスの大半が彼の話当真に受け止めたのは、他でもない彼の人柄だ。それを保護者からの苦情でパニックになった私は、話が大きくなるのを恐れるだけで、畑中君のことを考えなかった……」

「はあ」

「それから一年ほどして私の人生最大の痛恨事が英語科の勝又君のことだ。今、火葬場へ向かった篠山氏の圧力に私は屈した。校長職

にしがみついているには彼の言いなりになるしかなかった。何もかも知りながら勝又君をペテンにかけて解職に追い込んだ。自分の保身のために彼の一生を台無しにした。いや、人生を狂わされたのは彼ばかりじゃない。彼が命がけて愛した韓国の女性をも犠牲にした。彼女にも親兄弟があつたらうに。幸せであるべき二十年を二人から奪つて滅茶苦茶した私はとんでもない男だ。口が裂けても教育者だなどと言えない」

「……………」

「私の処分は新理事会の判断に任せる。篠山氏がいなくなった理事会だからまつとうな裁断を下すだろう。今さら勝又君に許しを乞える立場ではないが、折りをみて彼を復職させてはくれまいか」

「なんとむごいことをされたのですか。信じられません」

「梶井君な、君の校長補佐は畑中君に頼むといい」

「はあ、それも罪滅ぼしですか？」

「いや、だからも許してもらえないとは思ってない。私は勝又君を罠に落としてやれやれと思つた男だ。悪魔に見入られていたんだな、実際にほつとしたのだから。そこへ『勝又の解職を取り消さない』と一生悔いを残すぞつ』と辞表をフトコロに直談判に来たのが畑中君だった。私はどんな顔をしていたろうか。私は彼と目が合うのを避け、その後もしらを切り通した卑劣漢だ。畑中君の男気が衆を頼むのを潔しとしなかったから、私は校長でいられた。篠山氏のお陰でも何でもなかった。あのとき彼が組合を動かしていたら、私など簡単につぶせたものを……。副理事長にシツポを振っていた私は見苦しい小心者だ……………」

「何ということですか、二十年も……。酷いです、酷すぎます、校長」

(二十八) 机上の英姫

檉山学園では非常勤講師のことを慣習的に 講師の先生 という回りくどい呼び方をする。不特定の場合がそうだが、面と向っては先生となる。達也も勝又先生だ。先生 をつける・つけないは呼ぶ方の距離感覚で、敬意を込めた場合もあれば突き放して距離を保とうとする場合もある。教員どうしは仲間意識から「さんと気軽に呼びあう。達也はこれで自分との距離を測る。英姫の一件があつてから、昔のように勝又さんと呼ばれることは少ない。岳さんだけが相変わらず達ちゃんと呼んでくれる。若手講師は意にも介さないことでも、白髪頭の達也は勝俣先生と呼ばれるとやはりさびしい。

非常勤ながら一つ机を与えられている達也は、机の上でありつたけの韓国関係の辞書や雑誌をぶちまけている。

あんな奴でも取り柄があるって言いたいのだ。ま、ケチなデモンストレーションだな

達也はバカにされているのを承知でどうでもいいことに したのだ。若い留学組はふくれた財布に妻子の写真を入れて持ち歩き、机の上にはフレームに入れた家族の写真を立てている。日本人のメンタリテイもじょじょに変わって来たのかも知れない。

……よくやるよ、こんなアメリカのまねを……。

そう言っていたタツヤが数年前からその仲間だ。机の上に韓国の宮廷衣裳をまとった男女の写真が飾つてある。英姫と撮った婚禮写真を接写してもらったものだ。いや留学組をまねたのではない。

……失うものはすべて失つたのだ。もう他人の思惑も何も関係ない。それよりは英姫に自分のそばにいてほしいだけだ。英姫の写真は僕自身の追憶の扉だ。人に見せているのじゃない。他人が見たつて僕と英姫の間には割り込めやしないんだから……。

助手のおばさんたちは「きれいな方ですね」と言ってくれる。達

也も悪い気はしない。が、彼女たちにはこの写真にまつわる思い出がない。誘いそわれる過去がない。

……勝又先生もよくやるわねえ。あんな年になって恥ずかしくないのでかしら。写真の人は奥さんじゃなくて、とっくの昔にダメになった恋人のですってよ。惨じめつたらないわねえ。おー、やだ、やだ。未練な男だこと。今頃あちらさんは子供の三人もあつて賑やかにやってるんでしょう？ あっはっは……

……バカだと笑え、居直ったとさげすめ。どう思われようと英姫は生涯にたった一人の女なのだ。その恋人が韓国語と写真とで僕の前に生き生きとよみがえつて来るのは、他人とは分ち合えない僕の実事だ、空想ではない……。

達也もさすがに教員室で写真に向つて話しかけるまではしないが、人目がなければそれも我慢できる自信はない。

達也は写真の英姫の視線を感じながら梶井校長から頼まれた挨拶原稿に取りかかった。

……校長はカタカナで頼むと簡単に言うが、カタカナでは韓国語の音は表せない。表せないから通じない。かと言ってせっかくの乗り気の校長の出ばなを挫くいてシヨゲさせる訳には行かない。原稿の文章はそのまま、校長が望めば、ドアをびったり閉めて校長室で発音の特訓をしてやる……。

ハンゲゲソオシン（韓国よりお越し下さった）ソソソヨジャコド
ウンハツキヨ（瑞泉女子高等学校の）ソンセンニムヨロブン（先生方）、アンニヨンハシムニカ（今日は）。チャルオシヨツスムニダ（ようこそお出で下さいました）。チョヌン（私は）カシヤマハグオンコドウンハツキヨエ（檜山学園高等学校）ハツキヨジャン（校長の）カジイトモユキラゴハムニダ（梶井智行と申します）。

チョイ（私ども）かしまハグオンステブ（檜山学園スタッフ）
モドウルルテツピヨハヨ（全員を代表しまして）チンシム口（心より）ファニヨゲトウツスル（歓迎の意を）ナタナムニダ（表します）

本人に何の意味もなさない音の連なりを覚えて再生するのは周囲が思う以上に難しい。どこを間違えているのか本人には分からない。校長もやはり音を覚えきれず何度も間違えている。語呂合わせで無関係な意味をつけたら余計に混乱してしまう。達也は校長室にカセットテープを持ち込んで、ここはこう、あそこはああ、といちいち発音の注意を交えた練習風景をそのまま録音して校長に渡した。…テープを再生するたびに注意を聞けば少しは通じる発音になるかもしれない。

「とにかくくり返し まねてカタカナを見ずに言えるまでやってみてください。後は気持ちです」

「いや、ありがとうございます」

テープを手にした校長は、もう出来たつもりだ。

(二十九) 単独行動

「教頭先生、今回の榎山学園訪問のことですが……」

「何でしょう、姜先生？」

「実は、昔お世話になった方が八王子におられます。我がままなのですが、私だけ前日に発って、当日の朝に向こうの学校で合流するわけには行かないでしょうか」

「学校の予算ですからねえ。別行動はまずいですが、行き切符を自分持ちにしてもらえば差し支えないでしょうよ。学校関係の細かい通訳は貴女でなければ困るが、旅行社の通訳も同行することだし、その辺は心配要りませんよ」

「ありがとうございます」

旅装を整えた英姫はひとり仁川空港でKALの東京行きの出発便を待った。

……あのときは金浦空港からだっ たわ……

成田からリムジンで東京駅、オレンジ色の中央線で八王子へ。榎山学園のある小平市は下調べが済んでいるのか、気にしないようにしているのか、英姫は一度ぼんやりと窓外を見ただけだった。彼女の気持ちは思い出の八王子に急ぐのだろう。

八王子駅には広いコンコースができ、階段はエスカレーターになってすっかり様子を変えていた。駅前をタクシーが四列になってびっしりと埋め尽くし、人が歩くのは地下道だ。……無理もないわ、二十年だもの……。英姫はタクシーに乗り込んだ。

「三崎町の 無窮花 お願ひします」

「ムゲンファ？ 聞いたことねえなあ。三崎町なら歩けるだろに」

……あの頃はこんな失礼な運転手はいなかったわ……

「いったん三崎町に寄ってから寺田町へお願ひします」

三崎町の 無窮花 は 古宮 と名を変えていた。英姫は朝から

座りっぱなしで疲れた体を、背筋を伸ばしたり腕を振り回したりしながらほんのちよつと眺めただけで、待たせたタクシーに乗り込んだ。

「寺田公園っ」

運転手は返事もしないで車を発進させた。英姫は窓を過ぎる景色を見るでもなく見て考えた。

……二十年経ったんだもの。達也さんがいくら一途でも、あのぼろアパートにはいないだろうな……。

公園で車を降りて英姫はぐるりと辺りを見廻した。様子が違っている。彼女が通った達也のアパートは影も形もなかった。覚悟はしていたが淋しかった。

公園を走り廻っている女の子の子守りなのか、お婆さんがベンチで日向ぼっこしていた。英姫は軽い会釈をしてベンチの端に腰をおろした。

「お婆ちゃん、あそこにあったアパートはなくなってしまったんですね？」

「十五年も経つかねえ。ほら、反対側の五階建てになったんだよ。あっちに移ったんだ。大家さんが同じでさ」

お婆さんは身をよじって、洒落たマンション風の建物を指差した。「移ったんですか？」

「そりゃ、そっくりってわけじゃないけどさ。昔っからの人があそこだね」

「ありがとうございます」

英姫は立ち上がった。

……何をしようというの？ 後悔するわよ。……帰るの？ せつかく見届けに来たのに。

彼女の足は五階建て集合住宅に向かった。コツコツと響くヒールの音がステンレスの集合ポストの前で止まった。三〇四号に 勝又の名があった。じわつと目の奥が熱くなって動悸がした。英姫は外にまわって三階の四番目を見上げた。布団は干してないし洗濯物

もない。観葉植物の鉢もない。住人は男の一人暮らしだろう。

……タツヤと決まったわけじゃないわよ、バカね……。

彼女はエレベータ脇の階段をゆっくり三階へ昇っていった。コツコツ、コツコツ。

三〇四号の新聞受けに英字のジヤパンタイムズに隠れて韓国紙「トンマイルポ東亜日報」が突き刺さっていた。家族の表札はなく、鉄扉に貼り付いたマグネットのフックに、T・KACHUMATAと彫られた古ぼけた木札が懸けてある。T　タツヤだ。英姫はローマ字のイタズラを見て笑おうとしたが、笑えない。……こんな表札を何年かけているのだろう……。間違いない。英姫は我慢できなくなった。

『懐かしい達也さん　歳月は流れても私はここにとどまっています
あなたの英姫』

日本語でそう走り書きしたページを手帖から破り取って、紙片の半分ほどを東亜日報にはさんだ。恋人時代に、達也が教えてくれたフランスの詩人の一行だった。心臓が早鐘を打っている。おそろおそろチャイムのボタンに指を伸ばしてみた。奥で微かにピンポーンと鳴った気がしたが、返事はなかった。独身の男が平日の昼間に家にいるはずない。彼女は我にかえるまで、何度もボタンを押してしまったようだ。「達也さんっ」と声に出していたかも知れない。

……さ、ウロウロしていると女空き巢にまちがわれるわよ……。立ち去りかねる自分をそう励ました。期待に膨ふくらもつとする胸を両腕でコートの上からおさえた。

帰りはバスに乗った。薄暮の空に街路樹のケヤキが黒く枝を伸ばしていた。あの頃、木曜日と言えば決まって八王子までこの道を通かよったのだ。ひよつとして行き違うバスに達也が乗っていやしないか、そんな虫のいい想像もした。

ホテルに戻って、英姫は達也からの電話を待った。

「あらっ？」

彼女は考えられらいミスをしていた。懐かしい　と書いたメモにホテルの電話番号を書き忘れていたのだった。自分では落ち着い

ているつもりでも、達也の部屋を訪ねたこと自体が英姫には異常興奮だった。

昔の女から 懐かしい と寝耳に水のように持ちかけられて、その連絡先がないのでは達也さんはパニックになる。自分ならきつとそうなると思うと彼女は居ても立ってもいられなくなった。

英姫はホテルから慌ててタクシーで達也のマンションに舞い戻った。しかし、三〇四号には相変わらず灯りは点っていないかった。彼女は今晚のホテルのルームナンバー、それに仁川の現住所・電話番号を書いてまた手帖の一枚を破った。

……ここに達也さんが住んでいるのは間違いない。でも、こんなに遅くまで仕事？ いや 女？ 万一、女がいて、留守もその女の所に行ってるのだとしたら、その女と幸せだったりしたら、メモは達也さんの幸福を壊す災いになってしまう。私は執念深い、未練な、現れてはいけない昔の女なのか……。こんなことはただの一度だって考えたことがなかった。せつせと手紙を書いて彼を想い、まるで権利のように彼を思っで暮らして来たのに。あんな別れ方をしたのだから彼を愛していけないなどは夢にも思わずに来たのに。

しかし、二十年という年月はここにきて彼女を怯えさせ、逡巡させた。

……私はなんでここへ来てしまったろう……。

英姫は二枚の紙片を丸めてポケットにねじ込むとコートの襟を立てて、バス通りへ歩いた。新聞と表札を見たときの興奮を思い返そうとすると心がずんずん空しくなって、英姫は突然の尿意に襲われた。トイレのない小さな公園の隅にしゃがんで、冷え冷えした月の光の下で用をたした。そうしながら泣いた。

英姫が訪ねて来た証拠を失った達也の部屋は、今日も昨日と変わらない。……振り向けば目と鼻の先なのに何という距離だろう……。

英姫は世の中の 待つ女 を一人ひとり抱きしめてやりたくなつた。賢い女たちは時間を距離に換算しながら暮らしているのだろう

か。八王子には私の思い出だけで、達也の思い出はもうここに残っていないのか？ 待つというのは思い出ごとしが呼び合って巡り会うということではなかったのか。愛を信じるのに待ちすぎるなんてことがあっていいはずなのに……。

(三〇) 英姫の亡霊

達也は校長の最終特訓につき合った。

……校長はテープを持ち帰って家で練習したんだろうか。そうは思えない。挨拶原稿はカタカナをふったままだ。梶井校長はカナから離れない。韓国語はことばだ。人声だ。音だ。人から出たそれは魂だ。愛だ。詩だ。生命だ。時空を超える想念が空気をふるわせて魂を通い合わせる神の業だ。僕の英姫の身体だぞ。韓国語をカタカナで陵辱するな……。

達也は簡単に頼まれて気楽に引受けたことを後悔した。校長が韓国語に達也ほどの思い入れがあるはずなのだ。最初からそう頼まれたのだ。……挨拶ならせめて気持ちを含めてくれつ。

校長室での最終特訓を終えた達也は、西八王子駅前の屋台で、一皿のおでんとコップ酒で空きつ腹を一時おさえて帰宅した。彼は英姫の手が握ったノブを回した。

部屋の電話が鳴った。千葉にいる母親の早苗からだった。

「はあい、達也です」

「達也、いい人がいるんだけどね」

「なんだ、母さん。またそれかよ」

「なんだまたかって言ぐさはないだろ、おまえ……」

「僕はもう五十だよ。まともな神経の女が僕んとこなんか来るわけないじゃないか。すまないけど、その気はないからね。まったく何度言ったら……。じゃ、切るよっ」

「こら、達也っ。お前が五十ならアタシや七十五だつ。言っとくけどアタシがお前の葬式を出してやるわけには行かないんだからねっ、この親不孝ものがっ」

早苗はいつものように憤慨と落胆で電話を切る。

……何でもくつつけりゃいいってわけのもんじゃないだろに。し

かし、母の勧めただれかと結婚していたら、生活も今と違っていた
んだろう。いや、自分が振り向きもしなかった見合いを、あつたか
も知れないチャンスのように考えるのはあさましい。たしかにな、
母親に自分の葬式の心配させる息子がどこの世界にいる……。

早苗は一度しか会っていないが 英姫はいい娘だった。あの娘を
おまえの嫁にさせてやりたかった そう口癖のように何年も言い続
けた。それがいつからかピタッと彼女の名を口にしなくなった。そ
れからだ、そうは転がってもいない見合い話を探して次々と持ち込
んでくる。達也は母には感謝しなければと思いつながら、口からは、
どうしても正反対のことばが出てしまう。……母さん、七十五なの
か……。

達也はワンカップを片手に、アルミ鍋でインスタントラーメンを
煮ながら、陰気な部屋で孤独死する自分を想像した。その晚自分が
横たわる棺に取りすがって『英姫の亡霊が達也を殺しちまった』と
肩をふるわせて泣く老いた母の後ろ姿を夢に見た。

……英姫の亡霊か。そうか、僕は未だに韓国語をやっている。
英姫はいないのにやっている。韓国語は彼女を思い出すためにやる
のか？ 韓国語を続けるために彼女を思い出すのか？ どちらでも
あるような、どっちでもないような……。

(三十一) 訪問団の来校

檜山学園の正門を入るとマイクロバスが停まっていた。

……訪問団だな。でも、まだ八時じゃないか……

この日、二限目の英文法の授業で生徒たちが騒々しくなった。顔がいつせいに校庭を見ている。

「静かにしろ。どしたんだ、お前ら？」

「先生、女だよ、しかも団体っ！」

「先頭は校長だぜ。へっ、うれしそうな顔しちゃってえ」

「俺、あの紺のスーツ、学食に招待しようかなあ」

「バカか、お前。あそこのを喰わせりゃ招待じゃなくて虐待だよっ」

「おらあ、騒ぐなっ。カーテン閉めろ、失礼だぞっ」

「先生、だれなんだ、あれ？」

「韓国から来た女子高の先生たちだよ。ウチの学校を見学に来たんだ」

カーテンの隙き間からは一行の後ろ姿しか見えなかった。生徒が言うように校長がうれしそうにしていたのなら 歓迎の辞 はうまく行ったのだろう。校内を一通り案内した後、理事室で懇親会が予定されている。……レセプションの通訳といつても、雰囲気が出来上がった後半だから何てこともあるまい……。

地味な紺スーツを着た四十代前半と思われる女性が一行の通訳だった。ミス姜と言った。彼女は梶井校長の説明をメモに取りながら的確に訳していった。韓国も北方系の長身の美女に校長は機嫌がよかった。説明にも力が入った。図書館を案内しプラネタリウムを案内した。化学や物理の実験室、社会科学の資料室、LL教室、生徒一人一台のコンピュータルーム……。訪問団一行は檜山学園の充実した設備のいちいちに控え目な嘆声をあげていた。校長は饒舌になった。

「教員室もご覧になりますか？ 檜山学園の財産、優秀なシンクタ

ンクです。もうボチボチ授業から戻って来ますよ」

通訳のミス姜が韓国語に直した。訪問団長の教頭先生がうなずいて、一行は空き時間の教師が何人か残っているだけの教員室に入っていた。

教務助手のおばさんが立ち上がった一行に会釈した。彼女が顔を上げるとミス姜も彼女に向けた会釈から顔を上げるところだった。おばさんは眼をまん丸にして素頓狂すつとんきやうな声をあげた。

「ああっ、ああーっ！」
「どしたんだね、何事だね？」

校長のことばにおばさんは、ミス姜と乱雑な達也の机を交互に指差した。彼女によれば、ミス姜は韓国で子供が三人いて賑やかに暮らしていなければならぬ女性だった。

何事かと校長を先頭に訪問団の一行も達也の机に近づいて来た。

「きつたない机だな。だれのだ？」

「校長先生、今のは通訳しなくていいですね？」

ミス姜はククツと笑った。

梶井校長は机の上の『尹東柱』という本を開いて、すぐに閉じた。本はハンゲルで書かれていた。

「韓国語か。勝又先生の机か……」

「ムオラゴヨ、キョジャンニム？ たちゅヤシガヨクシヨギケーシ
ヌングニヨ！」

「に、日本語で言うてくださいよ、ミス姜カン」

机の上の写真に目をやった彼女の顔が硬直した。

「あ、いえ……」

ミス姜はフレームを取上げて、ぎゅっと胸に抱きしめた。顔を上げて眼を閉じた。彼女の耳の脇をつつと涙が伝い、彼女の手に落ちた。そこには長い年月の間にすっかりなじんでツヤを失ったエメラルドの指輪があった。

「あなたを思わない日は一日もなかったのよ、達也さん……」

二限終了のチャイムが鳴って、高校教員室の東と西の二つのドアから授業を終えた教員たちが次々に戻って来た。通路をふさいだ訪問団一行のために教員室はいつになくゴタついた。達也も授業を終えて帰ってきた。

……この人たちが訪問団だな、今はレセプションの時間のはずだが……。

「達ちゃんっ！」

入り口で待ち構えていた岳志が達也を小声で呼び止めた。肩をたいてアゴをしゃくった。達也の机で女が目を閉じて椅子に座っていた。達也は目を疑った。

……えっ！ まさか？

達也の驚きを押さえつけるように岳志がうなずいた。達也は目眩めまいがした。

ミス姜が目を開けて立ち上がった。美しい顔が歪んで何か言おうとしているが声が聞こえない。彼女は達也に両手を差し出した。写真が床に落ちてガラスが割れた。達也の手はミス姜の手を握った。教員たちのそれぞれがやりかけていたことを手を止めて音のした方を見ると、手を取り合っつてじつと見つめ合う男女がいた。広い教員室がしいんと静まり返った。二人の姿はだれの目にも自然だったし、静寂は、オーケストラの指揮棒が振られる直前の、楽器の音色が今にも聞こえだしそうな静寂で、起こるべくして起こった静寂のように思えたのだろう。教員室は声をたてるのも割り込むのも憚はばかられる空気に満たされていた。

岳志だけは以前にもこの静寂に立ち会ったような気がしていた。

デジャヴユ？ ……英姫と達也は二十秒ほども見つめ合っつて、まばたき一つしなかった。それも二人の意志で見つめ合っつていというより、何か二人の背後か頭上かに一つの意志が働いて、一組の男女が向き合わされたといった妙な感じだった。初めて出会った男女はお互いの瞳の奥に、どれだけ自分たちの未来を読み取るものなのだろう……。

岳志がゆつくり大きな拍手を始めた。教員たちも彼に倣った。訪問団の先生方もそうした。団長の教頭先生が岳志に負けじと大きな拍手を送ったからだ。……姜先生、やっと会えたのですね……。

教員室の拍手が退くと二人はようやく手を離れた。ミス姜が岳志の前に進み出て一礼した。

「畑中先生つ、お久しぶりです」

「おおつ、英姫、俺を覚えてるかっ」

「もちろんですよ。先生もお元気そうで……」

彼女の晴れやかな声と笑顔に、充血した岳志の目から涙がこぼれ落ちた。姜英姫は彼にハンカチを差し出した。

(三十二) 逝く者、来る者

達也は梶井校長からの復職依頼を断った。

「母の具合が思わしくありません。千葉の往復がこれまで以上に頻繁ばんになるうかと思えます。お気持ちがおありでしたら、非常勤で今少し檜山学園においてもらえませんか。専任ではご迷惑をかけますので」

「わかりました。学校の方はご心配なさらずにお母上のご看病を専一に……」

校長は頭をさげた。

達也が韓国に電話すると通話中でつながらないことがしばしばだ。やっとつながると、英姫は早苗と話していたのだという。

……また母さんが早く日本に来て顔を見せるとせっついているんだ。入院生活が長引いているからな。無理もないが……。

英姫は一度早苗に顔を見せておかなくてはいけないと思っていた。

……会えるうちに会っておこう。夏休みでは遅いかもしれない。達也さんにも報告しなくちゃいけないし……。

英姫は六月に入ると、週末を利用して達也が看病している義母を病室に見舞った。二十年ぶりに見る早苗の体はひと回り小さくなっていた。英姫は老女から実の娘のように迎えられ、甘えられた。しわだらけの早苗の両手が彼女の顔を包んだ。

「英姫、おまえは本当に奇特な娘だよ。長かったねえ。よおく待っていてくれたねえ。これで安心だ。ウチのバカ息子をたのむよ」

「たのむだなんて、お義母さま。ねえ、いいお話ですの。お医者さまがお腹の子供は三カ月ですって。お正月まで待っていてくださいね」

英姫は腹をさすって早苗に微笑んだ。

「そおかい、赤ん坊が。そりゃ、よかつたよお。英姫、授かりものだからね、身体は大事にしなきゃだよ」

「はいっ」

「ひどいな、僕より先に母さんに報告かい？ それにしても、飛行機だなんて無茶すんなよ」

高齡出産を気づかいなから笑顔を隠しきれない達也を見て、英姫は夫の優しい眼差しはつくづく早苗ゆずりだと思ふ。早苗が言った。

「英姫……」

「はい？」

「……駒隅田」

英姫が二十年ぶりに聞いた懐かしい早苗の ありがとう だった。英姫が初対面の早苗に親しみを覚え、尊敬するきっかけになったことばだった。

「……チヨヤマル口（私のほうこそ）」

英姫は早苗のことばを噛みしめた。

秋、十月の朝焼けの朝、病室の早苗は韓国の英姫を思い浮かべながら、赤ん坊の顔を見ずに息を引取った。老女の両手は毛布の下で祈るように組み合わされていた。

新しい墓標の前に立った喪服の英姫は腹が大きくせり出していた。彼女は声をかけた。

「お義母さま、赤ちゃんは女の子だと言われました。さっそく達也さんと相談して暁子あきこと名前をつけました。あなたの初孫です」（了）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9304d/>

烈女 姜英姫

2009年4月24日23時03分発行